

2001 年度提出 卒業論文

第一次世界大戦参戦を巡るオスマン帝国外交の研究
トルコ・ドイツ軍事同盟締結と「統一と進歩委員会」の対外的模索

南・西アジア過程 トルコ語専攻
8597049 貝瀬 雅典

- 目次 -

| | |
|---------------------------------------|----|
| 特筆事項 | 4 |
| 序章 | |
| 1. 本論が触れるオスマン帝国史の概要 | 5 |
| 2. 問題所在と先行研究 | 5 |
| 第1章 同盟関係の模索 | |
| 1. オスマン帝国政府の外交政策転換 | |
| (1) 基本的な外交状況概要 1914年に至るまでの構図 | 8 |
| (2) 「統一と進歩委員会」中心メンバーと対外交渉の積極化 | 10 |
| 2. 同盟打診の開始 | |
| (1) ロシアへの同盟打診 - ロシア皇帝表敬訪問 - | 12 |
| (2) 海軍大臣ジェマルのフランス海軍視察 | 14 |
| 第2章 ドイツとの「極秘軍事同盟」締結 | |
| 1. 交渉進展の経緯 | |
| (1) ドイツ側対応の急変化 | 17 |
| (2) 極秘体制での交渉 | 18 |
| 2. 8月2日 | |
| (1) 同盟の締結 構成条項に含まれた致命的問題 | 19 |
| (2) 武装中立への移行 | 21 |
| 第3章 同盟締結後の「統一派」政権 | |
| 1. 8月上旬の「統一派」外交 | |
| (1) ロシアへの同盟再打診 | 23 |
| (2) ドイツ地中海艦隊の到来 | 24 |
| (3) ドイツ艦のオスマン帝国帰属 偶然による参戦回避 | 25 |
| 2. 中立維持を巡る葛藤 | |
| (1) ドイツ本国からの圧力 タラートとハリルのブルガリア、ルーマニア訪問 | 27 |
| (2) エンヴェルの参戦準備 | 28 |
| (3) キャピチュレーションを巡る動向 参戦回避を目指した一連の交渉 | 29 |

| | | |
|-----|------------------------|----|
| 第4章 | オスマン帝国の参戦 | |
| 1. | 「統一派」閣僚の対立 | |
| (1) | エンヴェルの閣内孤立とスーホンの黒海進出要求 | 33 |
| (2) | 国際関係の深刻な悪化 | 34 |
| (3) | 財政問題 | 35 |
| 2. | オスマン帝国の参戦 | |
| (1) | ロシアへの攻撃命令 | 37 |
| (2) | 内閣の危機から宣戦布告へ | 38 |
| 第5章 | 結論 | 40 |
| | 参考文献一覧 | 42 |

< 本文 約 34800 字 (400 × 87) >

- 特筆事項 -

(本文)

- 1) 文中に現れる人物には初出に限り(注釈より本文を優先させてある) 「トルコ人」についてはトルコ語アルファベットを併記した。その他の人物は原則的には英語アルファベットで綴りを併記した。トルコ語の人名については、基本的に Feroz Ahmad (Çeviren: Nuran Yavuz) 1995: *İttihat ve Terakki 1908-1914* 掲載の人物資料に従った。1934年以降トルコ共和国で存命し、姓を設けた人物については、[]にこれを銘記した。
- 2) 人物名は基本的に、オスマン帝国におけるパシャ(Paşa)、ベイ(Bey)、エフェンディ(Efendi)等、また欧州各国における提督(Admiral)、将軍(General)等の称号を一切略してある。「オスカンエフェンディ (Oskan Efendi)」、「エンヴェルパシャ(Enver Paşa)」など、称号と一括した呼称がより一般的かつ自然である場合も多いが、本論で触れる期間中に出世しているケース、後に出世した称号の方が代表的であるケース等があることから、本稿内容に不要な説明を避ける意味で統一させた。
- 3) 本論では、欧米文献において一般的であること、及びオスマン帝国内でも自然に用いられていた模様であることから(e.g. Ali Haydar Mithat 1946, p.264.) 「トルコ」(Türkiye, Turkey)という呼称を「オスマン帝国(Osmanlı İmparatorluğu, the Ottoman Empire)」を指す同義語として併用している。

(注釈)

- 4) 論述の行程上やむを得ず孫引きの必要に迫られた資料は、全て元となる資料名等の情報を注記した。なお、直接筆者が参考にした資料、箇所は、続けて[]に記してある。
- 5) 4)での資料は基本的に、正確を期すため直接参考とした資料での記載を転記するよう努めた。但し、各国外務省所蔵文書については F.O.と記した上で、国名を明白にするためこれを独自に()に併記した。題目が略されていた場合は、フルネームに正したものを記した。出版年数等の情報は記述順序を変えている場合がある。
- 6) 参考文献一覧に示した論文、文献が論拠である場合は著者を記し、題目を全て省略した。また、繰り返しの際には *op.cit.*記号を排し、出版年を逐一示した。
- 7) *Ibid.*及び *Idem.*記号を用いているが、前注において複数の論拠がある場合等は混乱を避けるため著者名を併記した。

序章

1. 本論で触れるオスマン帝国史の概要

多民族、多宗教の人々を抱え、緩やかな統合体制を敷いていたオスマン帝国は、建国されたとされる 1299 年から 600 年を越えて存続を続けた長寿国家であった。しかし 20 世紀を迎え、西欧世界から「ヨーロッパの病人」などとも揶揄されるようになった内憂外患の程度は極限状態を迎えていた。そのうち「外患」の側面は、イギリス、フランス、ロシア、ドイツらヨーロッパ列強の軍事、経済あらゆる側面における台頭とオスマン帝国の半植民地化という過程そのものだったのである。そして、かつて欧州世界の脅威として君臨した一大イスラーム帝国が、ヨーロッパに端を発した第一次世界大戦に参戦し滅亡への決定的一步を踏み出すという皮肉な末路を辿ることになったのは、もはや周知のことである。

第一次世界大戦が勃発する 1914 年にオスマン帝国政権を実質的に掌握していたのは、一組織「統一と進歩委員会 (İttihat ve Terakki Cemiyeti)」¹の有力メンバーであった。彼らは、1911 年より継続して勃発したトリポリ、バルカン両戦争の結果、外交的孤立が深刻であることを重く受け止めざるを得なかった。そして、外交上でも積極的に動くべきと考えたのである。²真に信頼しうる同盟国を模索すべく、欧州列強との交渉が積極的に行われていった。そのような中、6 月末にオーストリア皇太子フェルディナンド (Ferdinand) がセルビア民族主義者に暗殺され、世界大戦の脅威が取り沙汰されるようになった。まさにドイツによる対露宣戦布告の直後、「統一派」最高幹部たちは欧州列強のなかでも最強とすら目された³ドイツとの軍事同盟締結に成功し、悲願を達したかにみえた。しかし、先の戦争による消耗が癒える間もなく参戦の危機は訪れ、彼らはドイツからの参戦催促と、参戦を回避したい厳しい国情の間で難局に追いこまれたのであった。そして、約 3 か月にわたる曖昧な態度を示した後、結果オスマン帝国はバルカン戦争終結から 2 年と経ることもなく、再び激しい戦火へと歩を進めたのである。

2. 問題所在と先行研究

本論は、以上のような 1914 年初頭から参戦に至る 11 月を主な視点に置き、「統一派」政府による外交と、それに伴った同政府中枢の内部動向について検証を進めていきたい。ま

¹「統一と進歩党 (İttihat ve Terakki Fırkası)」とも称されるが、秘密結社出身であるために「党 (firka)」なのか「委員会 (cemiyet)」なのかは、野党のみならず組織内でも論争的であった。ただ、1913 年の統一派会議では政治政党であることが宣言されている [Tunaya 1984, pp.31-32]。: 同組織名の日本語訳の略称は、「統一派」 [新井、2001] や「統一進歩団」 [山内、1999] など、確固としたものが定まっていない。本稿においても頻繁に用いるが、呼称についての議論を避ける意味で、ここでは以降「統一派」と一貫して略することにする。

² Djemal Pasha 1973, p.97; Zürcher 1993, p.116; 新井 2001, 145 頁。

³ ジョル 1997、57 頁。

たこの過程から、オスマン帝国が第一次世界大戦参戦に至った要因についても考察を行ってみたい。

本論で触れる近代史は、オスマン帝国からトルコ共和国への変遷の歴史を語る上で避けることのできない重要な転換点のひとつに位置している。無論、これまで我が国において研究の諸先達の手で多数出版されてきた通史等においても、必ず言及されているといえよう。もはや周知ながら、こうした日本語文献で第二次立憲制期の「統一派」支配体制として一般的な理解とされてきたのが、エンヴェル(Enver)、タラート(Mehmet Talât)、ジェマル(Ahmet Cemal)による「三頭政治」体制である。そして「三頭」のうち、参戦を巡ってとりわけ集中的に論じられ、その責任を一手に引き受けてきたのはエンヴェルであった。すなわち、このエンヴェルのドイツ傾倒に端を発し、彼が独裁的に政府内の諸反対を押し切り中央同盟側での参戦に踏み切ったと総括されている例がよく見かけられるのである。⁴

しかし、エンヴェルの参戦への積極的関与は明らかであるものの、この時期の動向が彼への戦争責任追求と非難のみで結論付けられる程、単純ではないことは今や明らかである。日本語通史文献としては極めて例外的ながら、新井政美氏が『トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ』⁵においてこの点を明確にしているものの、一方でオスマン帝国の参戦を主題に扱った専門的学術論文に目を向けてみると、恐らく日本国内においては存在自体が皆無ではないかとみられる。

一方、我が国の状況に対し、トルコは無論のこと、欧米においても膨大な研究と議論が活発になされてきた。人物史の研究や通史を含めるならば、オスマン帝国の参戦問題に一部でも触れられた文献は無限に存在しており、個人で全て網羅するのは物理的に不可能であろう。とはいえ、議論の余地がない程に決定的な論文の報告は限られている。これはオスマン帝国内の第一次資料が根本的に不足気味なことも原因で、参戦を巡る政府内の動向を確証するのは容易でないのが現状のようである。特に最大の焦点となるエンヴェルに関しては、肝心の当人が自身の回顧録を記さず(記したかもしれないが処分して)死亡した模様で、資料が致命的に限定されている。伴って、その動向と行動理念の解明には周囲の回顧録等に頼らざるを得ない面を有しているのである。例示すれば、エンヴェルの研究で重要なアイデミル氏(Şevket Süreyya Aydemir)の伝記『マケドニアから中央アジアへ エンヴェルパシャ』(1976年)は3巻に及び生涯を綴った大作であるが、参戦までの過程を述べるにあたっては、やはり当時の財務大臣ジャーヴィト(Mehmet Cavit)の記述などを用いてこの難点を補填しているのである。一方で欧米ではそれより早く、トランプナー氏(Ulrich Trumpener)が『第一次世界大戦へのトルコの参戦 - 責任の調査』(1962年)及び後年の『ドイツとオスマン帝国 1914 - 1918年』(1968年)で、当時公開されたドイツ外務省所蔵文書等を論拠の中心として用い、その点を克服している。

そのトランプナー氏は、参戦直前におけるドイツとエンヴェルの交渉状況を詳細に明ら

⁴ Cf. 鈴木 1993、60-63頁; 三橋 1966、403-404頁。

⁵ 以下、書、論文名の原語題は参考文献一覧を参照されたい。

かにしており、解明が難しいエンヴェルの真意を知る上で極めて貴重な研究といえる。氏はまた、「統一派」閣僚たちが参戦を巡って対立した経緯を浮き彫りにする一方、それまでの研究で陥りがちな見方であったエンヴェルのドイツへの単純的従属と、ドイツによる参戦強制、いわば陰謀論を排した画期的な論であった。ただ、論拠となる資料がドイツをはじめとする西欧文献が殆どを占め、必然的にドイツ側の主観的視点が含まれ、駐コンスタンチノーブルのドイツ使節団、大使館からの見地になっていることは否めない。そのため、エンヴェルの行動を主体的とする⁶あまりにドイツ側からの参戦催促の圧力を相対的に過小評価する結果になっている印象も拭えない側面がある。

これに対してクラト (Y.T. Kurat) 氏が 1967 年に提示した『トルコは如何にして、第一次世界大戦へ加わってしまったのか』は、トルコ側資料が欧米側に並行して適切に用いられ、オスマン帝国に視点が集中している。氏の論文もトランプナー氏と同様、エンヴェルが護国的な理念に従いながらも参戦へ主体的に行動したと論じているが、結論では異なり、本来見逃すことのできないドイツからの圧力も開戦に至った主要因として認識付けている。⁷ 結果的に、客観的立場で叙述された論として評価することができる。

ただ一方で、無論これらは代表的かつ秀逸な論文であるものの、他の多くの欧米文献とも共通して見られる疑問点は、「親独派 (pro-German)」、「参戦派 (interventionist)」等の単語を多用し、論全体で終始一貫して「統一派」最高幹部たちを単純的派閥に分類していることである。また、日本における多くの通史同様、やはりエンヴェルを当初から参戦志向の戦争家として決めつけているケースが多いのではないかと思われる。⁸ 果たして、実際にそうした規定が当てはまる程に単純な様相を呈していたのであろうか。

本稿では先達諸氏の研究を踏まえながらもこうした点に注意し、「統一派」最高幹部らが外交を通じて抱えていた複雑な問題に焦点を当てていきたい。その際、比較的近年にアラル氏によって発表された『オスマン人下院議長 ハリル・メンテシェの回顧録』や、当時「統一派」外の議員であったアリー・ハイダル・ミトハトによる『我が回想記 1982-1946 年』も本質に迫る上で重要な資料になろうと筆者は考えている。特に後者はなぜかあまり参考資料として目にしないが、政治権力の中心外にあった識者の見地を覗くという意味で有益なものとなるのではなかろうか。

第 1 章ではまず、第一次世界大戦勃発の 1914 年以前における対外状況について触れてみたい。

⁶ Cf. Trumpener 1962, pp. 369-370.

⁷ Kurat 1967, p.315.

⁸ e.g. Bayur 1953-1967; Kurat 1967; Zeman 1971.

第1章 同盟関係の模索

1. オスマン帝国政府の外交政策転換

(1) 基本的な外交状況概要 1914年に至るまでの構図

外交上、元来オスマン帝国は英仏、なかでもイギリスと密接な関係を保ってきた。両国の支援を受け、コンスタンチノーブルへ向かい南下するロシア帝国に対抗する図式こそが、クリミア戦争以来の伝統的な共通意識だったのである。そして「青年トルコ人革命」が成立した1908年以降のオスマン帝国でも同様の風潮は強いものであった。チャヴダル(Tevfik Çavdar)氏によれば、親英風潮はアリー(Âli) フアト(Keçecizade Fuat) 両パシャによるタンズィマート改革時代から根底にあり、多くのオスマン人はイギリス、ロシア両国の微妙な駆け引きを効率よく利用すべきだと考えていた模様である。⁹

裏返せば、1907年の英露協商締結以降、イギリスとロシアの関係が漸次的に緊密になっても親英外交は根強く主流を占めていたということになる。「統一派」政権もこれは例外でなかった。オスマン帝国がトリポリで対イタリア防衛戦に入った矢先の1911年、財務大臣ジャーヴィトがイギリスの海軍大臣チャーチル(Winston Churchill)に書簡を送り、同盟の打診をしている。チャーチルからの回答は、トリポリ戦争に対する中立を堅持するため現在は了承できないとの内容だったが、同時に次のように加えることを忘れなかった。¹⁰

- (かつて)貴方と親しく交流したのを、喜びと共に覚えております。ヨーロッパ諸国のなかで領土的野心を持たない唯一の国家こそは我々です。同じく、海軍力を保持しているのも我々なのです。本心から申し上げて、我々はトルコ、イギリス両国における親交の復活、維持を望んでおります。わが国の海軍力の増強により、貴国に有益な助力をすることができるのです。(1911年12月2日付) -

この文書を自身の回想録に載せたアリー・ハイダル・ミトハト(Ali Haydar Mithat)は、チャーチルの言葉をそのまま信用すれば将来的な同盟の可能性に含みを残した返答であると指摘している。だが、同時にあまりに社交辞令的側面が強いことは否定できないであろう。オスマン帝国の識者の立場としては、イギリスの「領土的野心を持たない」という主張は到底信用できるものではなかったに違いない。

そもそも1878年のベルリン条約における領土保全はヨーロッパ列強によって実質的に無視されていたのである。フランスはチュニジアを支配下に置いており、イタリアはトリポリへ侵攻している最中であった。そしてイギリスも例外でなく、オスマン帝国領である筈

⁹ Çavdar 1984, pp.346-347.

¹⁰ Ali Haydar Mithat 1946, pp.264-265. 因みにアリー・ハイダルはこの文書を1914年付と記している箇所があるが[*Ibid.*, p.263]、明らかに誤植或いは誤認と考えられる。

のエジプトを半ば統治下に置いていたのである。¹¹

それでも、第二次立憲制期前期の対外状況としては欧州列強のうち英仏と最も密接な関係にあった。特にイギリスとは結びつきが強く、まず軍事面では、1908年からリンパス（Arthur H. Limpus）の統率するイギリス海軍使節団が雇用されていた。¹²また、「統一派」は1911年に「艦隊委員会（Donanma Cemiyeti）」を組織して一般から資金を徴募し、新鋭戦艦2隻の建造をイギリスに委託していた。¹³その上経済面でも、輸出入取引額においてはイギリスが群を抜いて最大相手国だったのである。¹⁴フランスからはパウマン（Baumann）率いる使節団が憲兵の改革に派遣されていたが、¹⁵専ら金融の面でオスマン帝国に強い影響を与えており、「オスマン公債（Ottoman Public Debt）」のうち実に59%にも達する額を融資していた。¹⁶協商国というカテゴリーで解釈するならば、ロシアとだけが唯一、伝統的に敵対関係を継続していたといえる。

一方では中央同盟に属する二ヶ国とオスマン帝国の関係が悪化していた。オーストリア＝ハンガリー帝国とは、1908年のボスニア・ヘルツェゴビナ併合問題の際に「統一派」全体で世論を反響に扇動した経緯があったし、¹⁷イタリアとは1911年の時点では当に交戦中であつた。そうした中ではむしろ例外的といえたのがドイツで、イギリスとともにバグダード鉄道の敷設権を入手するなど、次第にオスマン帝国内での影響力を強めていた。¹⁸また、「統一派」とドイツ産業との癒着についても指摘されている。¹⁹しかしながら、先述のように英仏がそれ以上の影響力を占めていただけでなく、ベルリン駐在武官としてドイツとの接近を急速に進めたエンヴェルが本格的に帝都イスタンプルの政治舞台に登場するのはトリポリ戦の終了後（1912年）であり、²⁰それまでは敢えて魅力の少ない中央同盟へ接近するなど、考え難い発想だったであろう。

しかし、イタリアの侵攻直後に勃発した2度にわたるバルカン戦争（1912-1913年）は、従来の外交面における実績が無意味であることを露呈させ、ヨーロッパ外交舞台における実質的な孤立をいよいよ浮き彫りにさせた。半島の動乱に対し、英仏、さらにドイツを含

¹¹ Arar 1986, p.198.

¹² Trumpener 1968, pp.12-13; Kurat 1967, p.297.

¹³ Zürcher 1993, p.118. またこれはエーゲ海上で、ギリシャに圧倒されつつあつた海軍を増強する目的があつた[*Idem.*]. ギリシャとの海軍力競争に関連する研究としては、Halpern, Paul G. 1971: “The Greek and Turkish Navies: A Balkan Naval Race,” *The Mediterranean Naval Situation, 1908-1914*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, pp.314-354, pp.370-371 など。

¹⁴ Nebioglu, Osman 1941: *Die Auswirkungen der Kapitulationen auf die türkische Wirtschaft*. Jena: Universität Kiel, p.64 [Trumpener 1968, pp.9-10].

¹⁵ Kurat 1967, p.297.

¹⁶ Trumpener 1968, p.11.

¹⁷ Bridge 1984, pp.38-39; Zürcher 1993, pp.108-109; 新井 2001、115頁。

¹⁸ 特にカイザーとの良好な関係はアブデュルハミト二世の専制期から見られる。ドイツ皇帝ウィルヘルム二世はスルタンを支持し、1898年トルコを訪問した際には有名な「ドイツはムスリム300万人の友人である」との宣言を行った[Zürcher 1993, pp. 86].

¹⁹ 山内 1999、33頁。

むヨーロッパ諸国は沈黙を守り、停戦の介入も実質的支援も行わなかったのである。これは軍備上の不安から、バルカン戦争を全面戦争に至らしめることを諸国が懸念したなどの理由もあったようだが、²¹いかなる理由にせよ、オスマン帝国にとっては孤立無援を認識させる悲劇以外の何物でもなかった。結果、旧都エディルネこそ奪回したものの、オスマン帝国はマケドニアなど欧州側領土の殆どを喪失し、事実上の敗北を迎えたのである。

1913年夏から政権を完全掌握していた「統一派」はこの孤立を深刻に受け止め、また、それまでの曖昧な外交に対する反省を迫られた。²²トリポリ、バルカン両戦争における領土割譲は大きな打撃となり、300万平方キロの領土のうち110万平方キロが失われ、人口の面では2400万人のうち500万人が去る形になったのである。²³これはオスマン帝国自体の存亡を意識させるのに充分だった筈である。「統一派」政権は、ヨーロッパ諸国の間で形成されるグループのうち、いずれかとの同盟が国家存続に不可欠と判断した。そして、同盟締結の意志を積極的に欧州諸国へ発信し、可能性を探ることになるのである。²⁴

(2) 「統一と進歩委員会」中心メンバーと対外交渉の積極化

組織「統一派」の中樞は、1913年6月に政治的実権を完全に手にしてもなお、²⁵整然とした統率形態を持ってはいなかった。同組織において「幹部」と目される実力者は相当数に及ぶが、²⁶彼らは様々なカテゴリーによって分類することができる。トゥナヤ氏の示すところに従えば、出身別(軍人出身と文民出身)、或いは議会内・外のような区分が可能である。²⁷そしてこれらのグループは複数かつ極めて複雑な派閥を形成しており、しばしば対立を引き起こした。そのため、例えば一般的には「三頭政治」で有名な実力者、エンヴェル、

²⁰ 山内、同掲書、25頁。

²¹ ジョル 1997、85頁。

²² Talaat Pasha 1921, p.287.

²³ Ahmad 1995, p186. ; また、欧州人口の喪失による国内の民族バランスの激変は、「統一派」の政策イデオロギーをアナトリア、アラブ中心主義に転換させる原因となった [Idem.]。

²⁴ Talat Paşa 2000, p.31.

²⁵ 「統一派」が再び実権を握った地点として、1月の「大宰相府襲撃事件(Babı Âli Baskını)」による政変も挙げられるであろう。ただ、筆者は6月11日において、しばしば「統一派」と摩擦を生んだ非「統一派」の大宰相、マフムート・シェヴケト(Mahmut Şevket)暗殺で、内閣を代表する大宰相も「統一派」所属のサイト・ハリムに代わったこと、暗殺に伴う6月の逮捕劇以降、最大野党「自由と連合党(Hürriyet ve İtilâf Fırkası)」の武力組織たる「愛国将校団(Halaskâr Zabitan Grubu)」も目立った活動ができなくなった模様であることから、6月こそが「統一派」指導体制構築が完了した実権掌握の地点と見ている。追求した研究は、本論とは別途に期したい。Cf. 新井 2001、124-127頁。

²⁶ トゥナヤ(Tarık Zafer Tunaya)氏は、「幹部」にあたる人物を次のような所から指摘しており、その具体的な定義のための貴重な指針を示している[Tunaya 1984, pp.36-37]。 ; オスマン帝国議会議員、「統一派」中央委員会(Merkez-i Umumi) 被選出者、その他文官実力者(ハリラら)、その他「特別部隊」実力者。また、ツルヒャー氏は論拠を明確にしていなが、「幹部」にあたる人物の総数を約50人と示している[Zürcher 1993, p.115]。

²⁷ Tunaya 1984, p. 36.

タラート、そしてジェマルの間も、実は微妙な関係にあったのである。エンヴェルを中心とした軍人・将校とタラートら文官の派閥は目立って対立し、13年夏の組閣に際しては、軍人らがタラートを排除しようと画策した経緯もあった。²⁸一方でジェマルは、自分より若輩の将校でありながらアドリアノーブル奪回などの名声に支えられて急成長したエンヴェルに対抗心を剥き出しにしており、²⁹軍の内部ですら一枚岩とはいかなかったのである。

オスマン帝国の命運を決める1914年当時の内閣は、こうした複雑な関係を抱えた「統一派」の最高実力者が主体で組閣された。大宰相は、エジプトの雄として著名なムハンマド・アリーの子孫、サイト・ハリム(Sait Halim)が務めることとなった。しかし、後世の評価でしばしば「決断力に欠けた」³⁰との批判も受ける彼は、内閣の領袖たるその役職程の影響力を行使できなかったのである。閣内で実際に指導力を発揮したのも、文官では内務大臣として入閣したタラート、財務大臣ジャーヴィト、軍人としては陸軍大臣に就いたエンヴェル、海軍大臣のジェマルといった、やはり「統一派」内での実力者であった。特にエンヴェルは、軍部に加えて「統一派」の暗部たる、「特別部隊(Teşkilât-i Mahsusa)」「軍事部門」³¹における事実上の首領格であったことも踏まえると、これを背後として発言権が強まっていたことは疑いないであろう。

一方、対外交渉の舞台で主役となる外相ポストはサイト・ハリムが兼務していたが、外交方針についても主要閣僚、すなわち「統一派」最高幹部らが積極的にに関わり、各国との直接交渉に携わっていった。ただ、彼らの「得意分野」となる相手国は党での派閥の多様性さながらに各々別個に持っており、具体的にはバルカン戦争終了後から暫くの時節における各人の積極的外交活動、及び相応の成果に見ることができる。例えば、海相ジェマルはフランスとの友好関係構築に努め、「フランス・トルコ友好委員会」ともいべき団体を作り上げることに成功した。³²また、ジャーヴィトは先述の如くイギリスと頻繁に交わっただけでなく、自身でもパリにわたるなどジェマル同様にフランスへの接近も熱心に進めたことで知られる。³³イギリスに対しては、「統一派」所属ではないものの元大宰相のイブラヒム・ハック(İbrahim Hakkı)が長期間ロンドンに派遣され、バスラ湾を巡る影響範囲(zone of influence)策定交渉で合意に漕ぎ着けるといった成果をあげた模様である。³⁴その一方で、エンヴェルが駐在武官時代を通じてドイツに深く傾倒していたのは既に触れた通りである

²⁸ 新井 2001、128頁。：このエンヴェル・タラートの微妙な摩擦は、タラートが亡命先のドイツで暗殺されるまで存在していた模様である[Cf. 山内 1999、321-339頁]。

²⁹ Aydemir 1976, p.512.

³⁰ e.g. Ali Haydar Mithat 1946, p.255.

³¹ リビア、バルカン両戦争で活躍した「献身部隊(Fedaî)」から発展したといわれるが、詳しい組織形態などは未だに判明していない。遅れて創られた“政治部門”はある程度これと距離を保ち、同じく「統一派」幹部のバハエッティン・シャーキル(Bahaettin Şâkir)によって率いられた[Zürcher 1993, pp.114-115]。

³² Djemal Pasha 1973, pp.102-103.

³³ Ali Haydar Mithat 1946, pp.256-257.

³⁴ *Ibid.*, p.99; Ahmad 1995, p.208; Arar 1986, pp.186-187.

が、「統一派」全体としての基本路線はやはりドイツより英仏優先策にあり、ドイツへの期待は皆無に等しかった模様である。³⁵

こうして外交面でも各々が個人的に展開する彼らであったが、基本的な外交路線だけは対露防衛体制の構築という点で一致している筈であった。ところが、肝心の同盟の打診は内務大臣タラートによって極めて意外な方向から開始された。すなわち、当にそのロシアからである。次項では、5月におけるタラートのロシア訪問で口火を切った、協商諸国への同盟打診の状況について触れてみたい。

2. 同盟打診の開始

(1) ロシアへの同盟打診　ロシア皇帝表敬訪問

1914年に入り、非公式ながらも「統一派」政権が最初に同盟打診を行ったのは、帝政ロシアだった。ただ、例えばクラト氏も「奇妙なことに (oddly enough)」³⁶と述べているように、5月の段階で敢えてロシアへ接近を試みた真意について理解しにくい節がある。というのは、先述したように伝統的な南下政策でロシア自体が脅威の存在であっただけでなく、両国は1913年から14年にかけて2度も外交上で衝突を繰り返していたからである。

最初に摩擦が生じたのは、1913年10月末にドイツ軍事使節団が着任した時であった。使節団は一連の戦争で弱体化が露呈したトルコ軍を近代化すべく要請されたものだったが、ドイツと対立するロシアはこれを「非友好的行為」として激しく抗議し、英仏両国にも外交的支持を求めたのである。しかし、イギリスはリンパス指揮下の海軍使節団を既に派遣していたため懐柔策を採り、フランスもこのときは消極的にイギリスと歩調を合わせたに過ぎなかった。³⁷その結果、使節団はトルコ軍改革の任務の遂行を続け、極東で日本に敗戦した傷が癒えないロシアにとっては不安要素が残ることになったのである。

ところが今度は1914年初頭、ロシアはベルリン条約以来オスマン領として保証されてきた筈の東アナトリア、アルメニア人居住地区の改革と、国際査察団派遣の強い要求、つまり事実上の干渉を行った。「統一派」政府は宿敵たるロシア主導の査察団派遣を回避すべく、在コンスタチノーブルの諸国大使にロシアに対して圧力をかけるよう要請した。同時に、一連の対英交渉任務を背負いロンドンにいた元大宰相ハック主導の外交団に、査察団をイギリス主導で進めさせるべく交渉するよう指示したのである。しかし一度は合意に至ったものの、ロシアからの働きかけでイギリスは一転して交渉の場から撤退し、畢竟オスマン帝国はロシア主導の国際査察団を受け入れざるを得なかったのであった。³⁸

³⁵ Arar, *Idem*.

³⁶ Kurat 1967, p.294.

³⁷ ジョル 1997、88-90頁。

³⁸ Talaat Pasha 1921, pp.287-288; Djemal Pasha 1973, pp.98-100; Bodger 1984, pp.95-96; 新井 2001、145頁。新井氏は、このロシア中心の査察団受け入れをタラートによる和解政策の一環という形で触れているが、タラートの回顧録に見る一連の拒絶工作の事実と、同じ

こうした事情で、トルコ・ロシア両国間の関係は 1914 年初頭までに相当に悪化していたのである。しかも英、仏、独といったロシアよりはるかに密接な関係にあった諸国を差し置いてであることも踏まえると、ロシアへの歩み寄りには不可思議と断じて過言ではない。

だが如何なる理由があったにせよ、事実タラートは 5 月初旬、上院議員で前陸軍大臣のアフメット・イッゼット (Ahmet İzzet) を伴って使節を率い、ロシアへ向かったのである。アブデュルハミト二世の時代からの慣例として、ロシア皇帝がクリミア半島のヤルタへ休暇に來訪した際これを表敬訪問するというものがあった。タラートの訪露もこの習慣に従ったもので、このときは通算で 3 度目であった。そして、ニコライ二世 (Nikolas) への謁見は 10 日に実現し、彼らはその後「歓迎」の下に数日間滞在することになったのである。³⁹謁見後、使節はロシア外相ザゾノフ (Sazonov) らと会談の機会が設けられたが、ロシア側の論点は当然のことながら、先述した「使節団問題」とアルメニア人居住地域の「改革問題」に集中していた。ところがこれに対しタラートとイッゼットは、今回の訪問ではそうした諸問題について合意する全権を担っていないことを暗示し、また「トルコ側の責任者である外相は、大宰相を兼務しており多忙」などと主張しながら話を逸らしたのである。⁴⁰結果、この会議の間では同盟について一切触れられないどころか、何ら解決した問題もなかった。

タラートは同盟の話が帰国の日まで打ち出さなかった。そして滞在日程が終了し、艦艇エルトゥールル号 (Ertuğrul Yatu) の中で催された食事会の席で、タラートはザゾノフに密かに耳打ちしたのであった。アリー・ハイダル・ミトハトの記述に従えば、次のようなやりとりだった模様である。⁴¹

- ・ (タラート)「貴方に大切なことをお伝えしたいのですが」「...ロシア政府は我々と同盟を締結するなどできますかな？」
- ・ (ザゾノフ)「こんな重大なご提案、議論するにも余裕充分な時間があつた筈ですよ。このご提案をなぜこんな終わりの時まで抱えておいたのですか？」
- ・ (タラート)「それは貴方の個人的な意見を得るためですよ！」
- ・ (ザゾノフ)「ならばこうしましょう、3 日間、我々の大使がイスタンブルへ戻ります。(です)この重要事項のための基礎を築いてください。合意した内容もやはり我々

くタラート自身がこの工作を「失敗した(failed)[Talaat Pasha 1921, p.288]」という表現で叙述している点からすれば、疑問が残る。

³⁹ Kurat 1967, p.294. 最初の表敬訪問は 1879 年、2 度目は 1891 年であった[*Idem.*].

⁴⁰ Çavdar 1984, p.342; Ali Haydar Mithat 1946, pp.260-261.

⁴¹ Ali Haydar Mithat, *Idem.* アリー・ハイダル・ミトハトは典拠を示していないが、チャヴダル氏も現代トルコ語に替えてはいながらも全く同じ文章を掲載しており[Çavdar *Ibid.*, pp.342-343]、ある程度信頼が置ける資料として判断した。一次資料はザゾノフが何らかの形で残した回想であると推測しているが、正式な調査は次の機会に期したい。また()内の訳は、筆者自身の補足による。

の大使に(ロシア政府へ)伝えさせるので、私もそれに拠って行動を示します。ともかく、私は(この同盟締結という)事案を根本的には拒みません。」

タラートが本当に「ザゾノフ個人の意見を欲した」と述べたとすれば、帰国寸前まで同盟の提案を控えていた理由としては不可解であろう。何より、タラートがもし真剣に同盟を考えるのであれば、ロシアとの間に抱えていた問題に対し解決を図りながら、同時にザゾノフが言ったように会談の場で議論した方が確実だった筈なのである。既述の通り、ロシアへ接近するという発想自体が根本的に不自然であることも踏まえると、タラートは真剣に同盟の意志をアピールするつもりはなかったとする説が有力であると筆者は考えている。⁴²ただ、残念ながらタラート本人はこのロシア訪問に関して全く回想録で記述しておらず、⁴³私的な打診になった理由は様々な憶測が可能というのが実際の状況である。すなわち極論を挙げれば、単なる刹那的な思いつきだった可能性も決して払拭できないのである。

ところが、この極めて謎めいた最初の同盟打診によって話は一步前進し、「統一派」では同盟のための基本合意を模索しながらロシアとの予備交渉を進めていくことになった。また、改めて具体的に後述することになるが、対露交渉にはドイツに近いエンヴェルも取り敢えずは参加し、相互防衛協定の提案をすることになった。⁴⁴しかし、形式上では同盟の可能性を検討する段階にまで至ったとはいえ、ロシアとの折衝は結果として現実的な成果にはつながらなかった。オスマン帝国にとっては脅威たるロシア自体に接近する好機だったのに対し、ロシア側ではオスマン帝国と協力するという構想を持たなかったのである。オスマン帝国は同盟相手でなく、むしろ進出目標であった。⁴⁵

一方、肝心の英仏への接近努力が漸く実を結ぼうとしていた。フランスとの交流に熱心だったジェマルが、遂に同盟打診の好機を手にするようになったのである。

(2) 海軍大臣ジェマルのフランス海軍視察

タラートがロシアを訪れ交渉が始まった後、先に触れたように対仏友好推進を目指した組織設立を達成し、これに多くの賛同者を集めていたジェマルにフランスへ同盟を打診する好機が訪れたのは、6月中旬であった。フランス大使ボンパール(Bompard)がジェマ

⁴² タラートがドイツを最も好意的に見ていたという証拠がいくつか見られ[e.g. Talaat Pasha 1921, p.288; Kurat 1967, p.294]、タラートに限ればそもそも協商諸国より最初からドイツに期待していた可能性は高い。以下はあくまで筆者の仮説であるが、このときタラートはロシアとの同盟自体は全く目標になかったものの、英仏とロシアとの結束を理解しており(彼が早くから現実に察知していた「可能性」までは、アリー・ハイダル・ミトハトの回想[Ali Haydar Mithat 1946, p.262]に見ることができる)間接的にザゾノフに打診することで、単にイギリスの意向を漠然と探ろうとしたのではないか。仮にそうだとするならば、このときのザゾノフからの比較的積極性を伴った回答は、タラートにとって意外だった筈である。

⁴³ Kurat 1967, p.294.

⁴⁴ Arar 1986, p.197; Çavdar 1984, p.343;

⁴⁵ Çavdar, *Idem*; *Turuncu Kitap* No.11 (出版年等不明) [Arar, *Ibid.*, p. 191].

ルの貢献を評価し、7月半ばに実施されるフランス海軍訓練視察に招待してきたのである。首相兼外相であるヴィヴィアーニ(Viviani)との直接会談の機会ともなるこのパリ行きを、ジェマルは喜んで受諾することにした。⁴⁶

一方、おりしも彼のパリ渡航と前後して、ヨーロッパ国際舞台では大きな事件が発生していた。6月28日にオーストリア＝ハンガリー帝国の第一皇太子だったフェルディナンドがサラエボで暗殺されたのである。このテロ行為の実行犯がセルビア・クロアチア民族主義者であったことはもはや周知のことであるが、オーストリア＝ハンガリーでは翌月中旬を通し、セルビアに対する報復措置として最後通牒を突き付ける方針を確定しつつあったのである。⁴⁷そうした中で7月初めにパリへ到着したジェマルは、約2週間弱の日程でフランスに滞在することになった。そして予定通り海軍視察を行う合間に、会談の場を設けるべく外相ヴィヴィアーニを訪問したのである。ところが2度目の訪問においてヴィヴィアーニがロシアへ向かわざるを得ない旨を自身から告げられ、彼の交渉相手は政・商務長官マルゲリー(Margerie)に引き継がれることになった。ジェマル自身はこの交代を、話が具体化、進展する兆しだと捉え、歓迎とともに了承した模様である。⁴⁸

その後、あくまでジェマル本人の回想録に従えば、彼は暗殺事件が世界大戦へと発展する可能性を示唆しながら、フランスが同盟を締結するよう早期判断を迫り、オスマン帝国の協商グループ参加の利点をマルゲリーに説明していった模様である。具体的には、彼は中央同盟に対する英仏の包囲網を「鉄の輪」に例え、オスマン帝国の参加によってドイツが東方へ進出するのを防ぎ、同時にブルガリアが必然的に協商国側に加わらざるを得なくなり「輪」の完成を見るのだ、と優れた構想を披露したというのである。だがマルゲリーの返答は、同盟国(英露)が恐らく認めないだろうという理由に基づいた、事実上の拒否であったと彼は記している。⁴⁹

しかし、ジェマルによる以上のような交渉部分の回想は真偽の程が疑わしい。まず、当のヨーロッパ各国要人が暗殺事件後3週間に及んでも世界大戦の危機を真剣に捉えなかったにもかかわらず、⁵⁰生粋の軍人たるジェマルだけが卓越した先見の明を発揮したのかが怪しい。またマルゲリー側の詳細な報告によれば、ジェマルはこの会談でオスマン帝国政府政策の新方針について説明し、同盟関連というよりはむしろ親善(*rapprochement*)を目的とする内容を語っていた模様である。⁵¹よって、多少なりとも事実を歪曲させたフィクションが含まれている可能性はあると考えられる。

⁴⁶ Djemal Pasha 1973, pp.102-103.

⁴⁷ ジョル 1997、14 18 頁。

⁴⁸ Djemal Pasha 1973, pp.104-105. ジェマルは同盟打診と同時に、ギリシャとの間に軋轢を生んでいたエーゲ海上諸島問題に対するフランスの支援を要請した[*Idem.*; Fulton 1984, p.161].

⁴⁹ Djemal Pasha, *Ibid.*, pp. 105-106.

⁵⁰ ジョル 1997、18 頁。

⁵¹ Margerie, 'Note du Département', 13 July 1914, *Documents diplomatiques français, 1871-1914* (Paris, 1929-1955), 10, no. 504[Fulton 1984, p.170]. 遺憾ながら本研究の過程では筆者自身

ただ、恐らくは彼自身の認識として、この時に同盟打診のつもりで会談を行ったのは事実であろう。それに、マルジェリーから何ら有効的回答を得られなかったのも確かである。⁵²後になって、フランス視察の間に同行していたルモンド (Georges Rémond) に交渉の成否について問われたところ、ジェマルは一言、「まさかこんなにも酷い失望を味わうとは思ってもよらなかった！」と返答するのみであった。⁵³

バルカン戦争以降、フランスとの友好に心血を注いできたジェマルにとっては同盟の締結が悲願であったことはいうまでもない。しかし彼の期待に反して、既にフランスとロシア、そしてイギリスの接近は決定的で、さらにこれらの国々はバルカン半島上ではオスマン帝国よりバルカン諸国との同盟に期待していたのである。⁵⁴18日、彼は無念のうちに帰国することとなった。しかし、ジェマルの失敗は本人だけの問題ではなく、英仏への接近を目指す「統一派」自体の基本的な外交路線にも影を落とす結果となったのである。フランスの不了承は、恐らく「統一派」政権には、同じ協商国であるイギリスへの打診も絶望的であることを暗に念押しするものとして受け取られたであろう。そもそも先述したように、イギリスには1911年にチャーチルから同盟打診を撥ねつけられた経緯もあった。予想を超えた英仏露の結束は、「統一派」の外交的努力が徒労に終わる可能性をも暗示していたのである。

ところが、オスマン帝国の外交はジェマルの帰国直後に急展開を見せることになった。フランスとの交渉に並行して、同じように同盟打診を試みていたドイツが突然これに応じる姿勢を見せたのである。

でマルジェリーの記述自体を確認する機会にはなかった。今後の調査の課題としたい。

⁵² Fulton, *Ibid.*, p.161.

⁵³ Djemal Pasha 1973, pp.106-107.

⁵⁴ Zürcher 1993, p.116; Çavdar 1984, pp.346-347; 新井 2001、145頁。

第2章 ドイツとの「極秘軍事同盟」締結

1. 交渉進展の経緯

(1) ドイツ側対応の急変化

ジェマルによるフランスとの交渉が失敗し、彼が帰国の途についた7月下旬、帝都イスタンブルではドイツとの交渉が極めて突発的に始まっていた。

ここまでに見てきたように、ロシアとの交渉も目立った進展はなく、フランスから事実上の同盟拒否を受けたことが決定的となって協商諸国に対する積極的外交政策は暗礁に乗り上げかけていた。しかし陸相のエンヴェルなど、ドイツへ接近したとしても有益であると見る者にとっては、行動を活発化させる良い機会にもなったのである。⁵⁵そしてエンヴェルはいよいよ7月22日、自らドイツ大使ワンゲンハイム(Wangenheim)に同盟の予備交渉を打診したのであった。⁵⁶

ただ、ドイツへの同盟打診はジェマルの失敗を待って初めて行われた訳ではなく、実はエンヴェルが動く前にも試みられていたが拒絶された経緯があった。⁵⁷ドイツもフランスなどと同様、オスマン帝国との同盟には極めて消極的だったのである。ロシアはじめ各国には確かに、使節団派遣でドイツの影響がオスマン帝国で拡大するのを懸念する見方は存在したが、実際は軍事同盟の締結となるとドイツの立場は話が違っていた。⁵⁸ドイツ軍参謀総長モルトケ(Moltke)は、トルコとの同盟締結に見出される利益を全面的に否定するとともに、ヨーロッパ戦争の発生時には使節団を全面撤退させる権利も留保していた。⁵⁹そもそも使節団派遣を通じて、オスマン帝国軍が全く世界大戦に耐え得る状況にないことを最も理解していたのはドイツであったのである。よってドイツ側としては当然の対応として、7月22日に行われたエンヴェルの打診も再度頭ごなしに拒否したのであった。⁶⁰

ところがその直後の24日、皇帝ウィルヘルム二世(Wilhelm II)が、自国の利益に適う

⁵⁵ Kurat 1967, p.295. : エンヴェルは情論に基づいてドイツに期待した訳ではなく、自国の利益を打算的に見据えて決断していたと筆者は考えるが、この問題にはトランプナー氏が有力な論を展開している。氏によれば、エンヴェルとドイツ皇帝の関係は1913年1月の「大宰相府襲撃事件」が原因で相当冷え切っており、エンヴェルがドイツ皇帝の言いなりだったとする巷説は否定される模様である[Trumpener 1968, p.18]。

⁵⁶ Trumpener, *Ibid.*, p.15. : この打診に前後して、18日から23日にかけて大宰相の別邸で対独同盟に関する極秘協議が行われていた[Kurat 1967, p.297; Heller 1983, p.134]。

⁵⁷ Djemal Pasha, 1973, p.107. タラートも、夏以前に交渉が行われたが拒否された過程に触れている。しかし、やはり日時は一切記しておらず[Talaat Pasha 1921, p.288]、ドイツへの同盟打診が具体的にいつから始まったかは不明である。今後の研究に期したい。

⁵⁸ Trumpener 1968, p.14. こうした懸念は、オスマン帝国の多くの識者にも共有されていた模様である[Ali Haydar Mithat 1946, p.261]。

⁵⁹ Carl Mühlmann 1940: *Das Deutsch-Türkische Waffenbündniss an Weltkriege 1914-1918*, Leipzig, pp.13-14 [Trumpener *Ibid.*, p.14; Kurat 1967, p.296]。

⁶⁰ Trumpener 1984, p.124.

という独自の判断の下、オスマン帝国との同盟締結に支持を打ち出したのである。⁶¹一見すると単なる個人的嗜好に過ぎないようなこの意向は、しかし恐らく世界大戦の危機が突如として高まったことに起因していると考えられる。その前日、オーストリア＝ハンガリー帝国がセルビアに対し、48時間以内の回答期限を設けた最後通牒を突き付けていたのである。⁶²ともあれドイツでは、皇帝の発言をうけて軍や政府も予備交渉の開始へと方針を転換させざるを得なかった。

こうして、エンヴェルの打診は間接的ながらもいわば国際的緊張に支えられる形で、あくまで例外的な成功を見ることになったのである。その後、オスマン帝国が28日に改めて公式に同盟の提案をすると、ベルリン政府側の受諾と共にすぐさま予備交渉が開始されたのであった。⁶³

(2) 極秘体制での交渉

ドイツ側の交渉受諾という展開は、一連の積極外交が同盟国を模索して行われた点からすれば紛れもない進展であったが、一方ではオスマン帝国内においても複雑な問題を浮上させていた。既に述べたように、「統一派」政権全体で同盟相手として最も期待されたのは英仏であり、ドイツに対する期待は薄かった。ましてやその同盟国であるオーストリア＝ハンガリーなどとは、全く関係改善が達成されていなかったのである。⁶⁴交渉の事実が広く知られれば、「統一派」の枠内に留まらずオスマン帝国議会でも賛否両論が噴出し、努力の成果として漸く辿りついた交渉開始の遅延や反故の可能性は目に見えて明らかであった。⁶⁵さらに、閣僚中の「統一派」実力者で英仏接近に尽力していた財務相ジャーヴィトや、同じくフランスに接近し失意の下に帰国したばかりの海相ジェマルが黙っていない可能性も十分に予測されたのである。そのため、同盟交渉の進展は最初の段階から、内閣はもとより「統一派」最高幹部でも限られた人々によって極秘に保たれることになった。当初から交渉に携わったのは、エンヴェルに加え、わずかに大宰相のサイト・ハリム、内相タラート、そして帝国議会下院議長の任にあったハリル(Halil [Menteşe])の4人のみである。⁶⁶

ジェマルは最低限の「暗示」まではされていた。彼の帰国後にタラートが対独同盟について賛否を問い質しているのである。このときジェマルは、自身が失敗したことによる失望感から「トルコを孤立した状況から救ってくれる同盟は全て受け入れたい」⁶⁷と言い放ったが、背後で現実に話が進行しているとは知らず終いであった。彼は、4人が何かしらの秘

⁶¹ Trumpener 1968, p.17; Çavdar 1983, p.346.

⁶² Trumpener, *Idem.*; ジョル 1997、17-23 頁。

⁶³ *Die deutschen Dokumente zum Kriegsausbruch*, No. 285[Trumpener, *Ibid.*, p. 15]. 交渉開始日については異説もあり、ゼーマン(Z.A.B. Zeman)氏は論拠こそ明確にしていけないが、27日午前9時半との日付を記している [Zeman 1971, p.56].

⁶⁴ Bridge 1984, p.45.

⁶⁵ Cf. Ali Haydar Mithat 1946, p.258.

⁶⁶ Zürcher 1993, p.116; 新井 2001, 146 頁。

密協議を行っているまでは察知していたが、結局は 8 月 2 日の同盟締結後になって初めて真相を知ったのである。⁶⁸一方、ジャーヴィトにもドイツとの合意は伏せられる予定であったが、締結交渉が開始される 8 月 1 日当日、偶然の事故で彼の耳に入ることとなった。7 月初旬から問題となっていた支払猶予令を巡る用事で大宰相府を訪れたジャーヴィトは、ドイツ大使館参事官のウェーバー (Weber) がいたことで異常事態に気がつき、先の 4 人に問い質したのである。大宰相らは極秘事項であると念を押した上で、彼に同盟文書の草稿を明らかにして意見を求めた。しかし、同盟交渉の存在までは知らされた彼も、その日に同盟が締結されることなどは全く伝えられなかったのである。⁶⁹

同盟交渉の進展が徹底的に秘密にされた理由は、表向き「安全保障」であった。⁷⁰しかし、ジェマル、ジャーヴィトの 2 人に対するこうした処遇からも改めて浮き彫りになるのは、大宰相ら 4 人が反対意見の燻る前に同盟を既成事実にしてしまうべく画策したことである。ドイツとの同盟が持ちあがっていることまで示唆しておきながら、その具体的な経過と同盟締結の日時までには一切伝えていない点で非常に巧妙であったといえよう。ただ、こうして「統一派」の中核レヴェルでも徹底されたこの極秘体制は同盟の早期締結のために功を奏したのは確かで、エンヴェルの打診から 10 日後の 8 月 1 日から早速、締結交渉が行われることとなったのである。

2 . 8 月 2 日

(1) 同盟の締結 構成条項に含まれた致命的問題

トルコ・ドイツ軍事同盟は一晩にわたる長時間の話し合いを経て、8 月 2 日早朝、大宰相の別邸で調印された。このときの同盟文書のオリジナルは、ドイツ側では存在とその所在先が推定されているものの、⁷¹一方のトルコ外務省の説明では未公開となっている模様である。実際は既に存在しておらず、敗戦及び主要メンバーの亡命と同時に廃棄されたのではないかとの疑いも持たれる。⁷²とはいえ、核心となる条項内容は既に諸研究者によって明らかにされている。ここでは、その中でも極めて簡潔にしているツルヒャー氏の記述を基本

⁶⁷ Djemal Pasha 1973, p.108; Kurat 1967, p.298.

⁶⁸ Djemal Pasha, *Ibid.*, pp.108-109.

⁶⁹ Aydemir 1976, pp.522-524; Kurat 1967, p.298. このとき、ジャーヴィトは突然の重大な新事実に対し、驚嘆のあまり何も言うことができなかった[Aydemir, *Idem.*]: アイデミル氏が掲載したジャーヴィトの「手記(not defteri)」は、出典が明確な形式で注記されていない。だがこの箇所と同じ内容を、クラト氏が「ジャーヴィト・ベイの回顧録(“Cavit Bey Hatıraları,” *Tanin*, 16 October 1944.)」を参考に用いていることから、『こだま(*Tanin*)』誌連載の記事とほぼ同一と筆者は考える。本論の研究上では同誌への直接的調査が困難であったため、ジャーヴィトの回想については以降もアイデミル氏掲載の「手記」を参考に用いていきたい。

⁷⁰ Kurat 1967, p.297.

⁷¹ Cf. Trumpener 1968, p.16.

⁷² Cf. Aydemir 1976, p.519.

に、アイデミル氏の研究を同時に参照しながら概要を以下に示したい。⁷³

(トルコ・ドイツ間軍事同盟概要)

両国はオーストリア、セルビア間の如何なる衝突に対しても中立を維持する。

ロシアがこの衝突に介入し、ドイツも介入せざるを得なくなった場合は、オスマン帝国が(三国同盟側に加わり)⁷⁴参戦する。

ドイツ軍事使節団はトルコに駐留し、オスマン軍最高司令部の下に実質的任務が与えられる。

ドイツは、必要に応じては軍事力によりオスマン帝国領を防衛する。

当協定は、直ちに効力を発生し 1918 年 12 月 31 日まで持続する。

当協定は、両国いずれかに異論がない限り、更に 5 年間更新される。

スルタン及びカイザーは 1 ヶ月以内に当協定を承認する。

当協定は、極秘とされる。

一瞥しただけでは、オスマン帝国がドイツの軍事的全面支援を獲得した印象も受けるが、実はこの同盟はオスマン帝国にとって不利、かつ極めて危険な内容であった。アイデミル氏も論じているように、条項に見られる防衛規定は、地中海に展開中の僅かな海軍力を別にすれば、国境が直接に接していないため有名無実だったのである。⁷⁵

さらに最大の問題が条項にあった。ドイツは既に同盟交渉開始直前の 1 日に対露宣戦に踏み切っていたから、この条項はそのままオスマン帝国の即時参戦を義務化するものに他ならなかったのである。それどころか欧州国際舞台で全面戦争が回避できない段階になりつつあったことで、オスマン帝国が対露参戦すれば、その同盟国の英仏とも対峙するのは決定的であった。つまり端的にいえば、この同盟はオスマン帝国にとって、英仏露の協商国軍全々と即座に戦争状態に陥ることを意味していたのである。

ところが、新井氏やツルヒャー氏も同様の指摘をしているように、彼らは英仏を敵にまわすという深刻な事態に気が付いていなかった疑いがある。⁷⁶とりわけ、ハリルと大宰相の 2 人がそうである。ハリルの回顧録では、7 月中旬(恐らくは先に触れた 18 日から 23 日にかけての秘密協議中において) 2 人で次のようなやりとりをしたと述べられている。⁷⁷

・(サイト・ハリム)「ハリルベイ、私はドイツとの同盟を準備しているのだが。貴殿はどう思われるか。続行すべきだろうか? 貴殿の意見が知りたい。」

⁷³ Zürcher 1993, p.117; Aydemir, *Ibid.*, p.518.

⁷⁴ アイデミル氏の研究では、「三国同盟(Üçlü İttifakı)」という言葉は用いられていない。

⁷⁵ Aydemir, *Ibid.*, p.517.

⁷⁶ 新井 2001、146 頁; Zürcher 1993, p.117.

- ・（ハリル）「イギリスとフランス側へのあらゆる事業が結論に至っていないことから、単にロシアに対する防衛関連、という条件でドイツとの同盟に成功するならば、我が国に貢献なされたこととなります。」

また、1日の交渉直前を回想して、ハリルは以下のように続けている。⁷⁸

私は、決定された条約文書を一読した。単に対露防衛関連として用意されているのを、はっきりこの目にしたのである。

すなわちこの回想からは、ハリルらが当時まだ、英仏とロシアを完全に切り離して状況判断していたことと、軍事同盟を文面通りにしか解釈していなかった様子が伺えるのである。また加えて、以降でも触れるが、即時参戦を食い止めるべく、政府が直後焦るように追加条項を提案していることや、大宰相は自身の署名で調印したにもかかわらず、その後掌を返したように中立体制維持を主張する急先鋒へ転じていることも、やはり調印時にロシア以外の敵国を全く念頭に置いていなかった可能性を高めているのである。

しかし、当に調印直後の彼らにとって、孤立無援から脱した事実は積極外交がもたらしたひとつの「成果」に違いなかった。大宰相ら4人は調印作業の終了をもって、当日のうちにジェマルやジャーヴィトラ幹部同胞にもその「成果」を披露することに決定したのである。⁷⁹

（2）武装中立への移行

2日の夜、大宰相ら「統一派」の最高幹部は相次いでエンヴェル邸に集まった。ジェマルの回顧録によると、真相を伝えられたジェマルは、勝手に既成事実化されたことに不快感こそ示しながらも、基本的には同盟を成功として認識し同調したとされている。⁸⁰ただジャーヴィトの観察では、このときジェマルは感情的にかなり立腹し、実際のところはその勢いで大臣職の辞任までも口にしていた模様である。⁸¹

しかしながら、最も激しく反対したのはそのジャーヴィト自身であった。確かに彼は英仏優先策を採ってはいたが、恐らく主要閣僚中では最も客観的な行動理念を持っており、ただ一人、同盟の危険性を即座に看破していたのである。2日の会合でも、彼はジェマルと好対照に、ドイツ軍によるオスマン帝国の防衛が空想であることを論理立てて鋭く指摘し

⁷⁷ Arar 1986, p.187.

⁷⁸ *Idem.*

⁷⁹ 同じく中央同盟側にあったオーストリア＝ハンガリーとは、同国の在イスタンブル大使から同日中に同盟合意の内示をもらっており、後に対独同盟と同内容の同盟を調印することになった[Talât Paşa 2000, p.32; Djemal Pasha 1973, p.109.]。

⁸⁰ Djemal Pasha, *Ibid.*, pp.108-110; Kurat 1967, pp.298-299.

⁸¹ Aydemir 1976, p.524-525.

ている。その上で、自国の命運を博打よろしくドイツの勝利に委ねたことへ批判を浴びせかけたのである。だが既成事実を前にして、財務相の反対は無力であった。結局、大宰相が彼の主張を一方的に受け流してしまい、同盟内容が孕んだ危険性に関してその場で反省されることはなかったのである。⁸²

一方で、同盟調印を受けた措置が既に実行されていた。同日2日、戦時動員令(*seferberlik, mobilization*)が宣言され、オスマン帝国はヨーロッパ戦争に対して武装中立体制をとることになった。また、戦時体制への移行を口実として帝国議会の閉鎖も決定されていた。このとき即時参戦に踏み切らなかったのは、エンヴェルが武装動員の完了に時間がかかると判断し、主張したものである。⁸³調印が終了した段階では、両政府元首による同盟承認がまだで同盟が発効していなかったため、参戦義務規定には抵触していなかった。⁸⁴しかし「統一派」政府は発効後も条約を無視して、3ヶ月弱にわたり姿勢を曖昧にし続けることになる。そもそも彼らの究極的な目標はオスマン帝国存続の一点にあり、国力回復の時間稼ぎも手段のうちだったのである。⁸⁵

ところで、コンスタンチノーブルでは武装中立が宣言された2日、動揺こそ見られながらも普段とそう変わらない朝を迎えていたようである。⁸⁶しかしちょうどその頃、政府のみならず帝国臣民にも衝撃を伴う情報が、駐ロンドン大使テヴフィク(Tevfik)から入電されることになった。イギリスに1911年から建造を依頼していた軍艦、オスマン(Osman)とレシャディーエ(Reşadiye)が同国によって接收されたのである。既に述べた通り、2隻の建造資金には、「統一派」で「艦隊委員会」を設立し民間から集めた募金を充てた経緯があり、エーゲ海上でギリシャに対する牽制に用いられる予定であった。実際のところは、1日にタラートとエンヴェルが完成後両艦を北海上のドイツ港湾へ展開させるよう要請したため、イギリスによる接收はこれを警戒したことによる当然の措置だった模様である。だが、そうした実情など無関係に、世論の反ギリシャ感情はそのまま反英感情に転化したのであった。⁸⁷

イギリスによる軍艦接收を皮切りに、オスマン帝国の世論は次第に反英ムードが漸進的に高揚していくこととなった。しかし「統一派」閣僚実力者らは、英仏との交渉もこれまで通りに続行し、ひたすら早期参戦の回避に向けて尽力する動きを見せるのである。次章は、こうした対独同盟締結後のオスマン帝国政府外交について見ていきたい。

⁸² *Idem.* この地点で同盟の存在を知る人物は、次の7人であった。大宰相サイト・ハリム、シェイヒュルイスラーム・エミール(Emir)、陸相エンヴェル、内相タラート、海相ジェマル、財務相ジャーヴィト、そして下院議長のハリルである。後にタラートから司法相イブラヒム(İbrahim)と教育相シュクリュ(Şükrü)にも伝えられた模様だが、他の閣僚や「統一派」メンバーには極秘とされた[Djermal Pasha 1973, p.110; Kurat 1967, pp.298-299]。

⁸³ Arar 1986, p.192; Djermal Pasha 1973, p.116; Kurat 1967, p.301.

⁸⁴ Cf. Aydemir 1976, p.531.

⁸⁵ Cf. Arar 1986, p.182.

⁸⁶ Çavdar 1984, p.357.

⁸⁷ Kurat 1967, pp.299-300; Trumpener 1968, p.24; Zürcher 1993, p.118; 新井 2001、146頁。

第3章 同盟締結後の「統一派」政権

1. 8月上旬の「統一派」外交

(1) ロシアへの同盟再打診

欧州では急速に事態が進展していた。8月3日にドイツがフランスに宣戦布告、さらにドイツのベルギー侵入を契機にイギリスが5日に対独宣戦し、戦火は欧州世界全体を巻き込む規模へと発展する兆しを見せていたのである。⁸⁸これに対してオスマン帝国では、ドイツ及びオーストリア＝ハンガリーとの軍事同盟締結をうけ、動員令の下に武装準備が始まろうとしていた。しかし、「統一派」政府はドイツ・ベルリン司令部の思惑に反し、同盟が正式承認され次第すぐさま義務化する筈の参戦には曖昧な態度を示したのであった。

こうした、「統一派」政府閣僚の中には連合諸国との同盟打診を継続する人物もいた。しかもそのひとりには、戦時体制下で帝国軍最高指令官代理を兼任したエンヴェルだったのである。イギリスが参戦した5日、奇妙なことに彼はロシアの駐在武官に対し、複数の相互合意協定と防衛同盟の提案をするという意外な行動に出た。⁸⁹ロシアへの積極的な働きかけは、なにひとつ有効な合意を見出せずに尻すぼみになっていったタラートの非公式な同盟打診以来のものであったといえる。ただ、エンヴェルがロシア側に提示した内容はより具体的で、次のようなものであった。⁹⁰

カフカス国境におけるオスマン軍を撤退させる。

ロシアに対し侵攻してきた場合、ブルガリアを含む全バルカン諸国に対処する目的で、トルコはロシアに軍を充当する（＝支援のためにバルカンへ派兵する）。

（軍事使節団として駐在する）ドイツ将校はトルコから撤退させる。

（トルコは）経線⁹¹までのトラキア地方を領土として要求する。

（トルコは）エーゲ海における諸島を領土として要求する。

上記とは別に、ロシア・オスマン帝国間で10年間の防衛的同盟を締結する。

軍事、運輸の要衝たるイスタンブルの「海峡」⁹²閉鎖だけは避けなければいけないロシアは、こうしたエンヴェルの提案を当初前向きに捉えた。大使ギアスは本国の外相ザゾノフに対してこの突然の打診を受諾するよう進言し、再び活発化した交渉は8月末まで進むこ

⁸⁸ 本論では以降、「協商国(the Entente)」に加えて、英仏露側諸国を指して欧・土文献でも多用される「連合国(İtilâf Devletleri, the Allied)」も併用していく。

⁸⁹ Trumpener 1968, p.24.

⁹⁰ *Rus Diplomatik Gizli Vesaiiki*, No. 1939[Arar 1986, p.197.]. ()内は筆者の判断で補足した。

⁹¹ 具体的にどこまでを指すかは不明であるが、ブルガリア領の一部を示すと推測される。

⁹² 本論ではダーダネルス、ボスポラス両海峡を合わせた略称として、以降「海峡(the Straits)」を用いる。

とになったのである。⁹³

しかしロシアの姿勢とは対照的に、エンヴェルが果たして真剣に同盟を検討していたのかに関しては疑問が付きまとう。そもそも条項は、当時のオスマン帝国の軍事組織体系で参謀本部に至るまでドイツ将校が浸透していたことからすれば実現が難しく、⁹⁴当然ながら漸く調印に漕ぎ着けたばかりである軍事同盟破棄の必要性を伴っていた。またエンヴェル自身が、ロシア側に提案した内容をドイツ大使館に漏洩していたことも判っており、条項はロシアを逆に叩くためにバルカン地方へ派兵する場合のカムフラージュだった疑いがある。⁹⁵こうしたことから少なくとも彼の意図はロシアとの同盟締結とは別にあり、恐らくは融和策を装い中央同盟傾倒の印象を消すことなどが目的だったと考えられる。⁹⁶

ともあれエンヴェルは、将来の開戦時に最も警戒すべき存在であるロシアに対して、やもすると意図不明な「先行策」を実行したのである。しかし、こうしてゆとりを持った外交を引き続き展開させる間もなく、オスマン帝国には中立体制崩壊の危険が迫っていたのであった。

(2) ドイツ地中海艦隊の到来

2日に軍事動員が開始されたものの、時間がかかるのは明白であった。ところが、そうした準備段階を踏む合間もなく、オスマン帝国には参戦の危機が即座に訪れた。エンヴェルの下に、ドイツ海軍地中海艦隊のゲーベン (Goeben) とブレスラウ (Breslau) の2隻がイギリス艦隊に追跡され、オスマン帝国領の「海峡」への退避を求めていることが伝えられたのである。クラト氏によると、条約調印から2日後の8月4日のことであった。⁹⁷

しかし、名目上は中立を保持しているオスマン帝国にとって、両艦の入港を容認することは国際世界に対して中央同盟側へ帰属したことを暗示してしまうことに他ならなかった。しかもその頃の「統一派」政権は、中立体制を維持するために英仏露各国大使との交渉の道を確認していたこともあり、ドイツ傾倒を印象付けるような事態はどうしても避けなければいけなかったのである。とはいえ軍事同盟の手前、攻撃に晒されているドイツの戦艦

⁹³ Bodger 1984, p.96; Ali Haydar Mithat 1946, pp.272-273. 8月上旬の段階では、ロシア軍用船も「海峡」を自由に通過していた模様である[Djemal Pasha 1973, pp.117-118]。

⁹⁴ Cf. Kurat 1967, p.301.

⁹⁵ Trumpener 1968, pp.24-25.

⁹⁶ Cf. Ali Haydar Mithat 1946, pp.261-262, p.275. 仮説ではあるが、こうしたエンヴェルの行動には、連合国側との交渉継続の道があることをちらつかせることで、早期参戦を一方的に要求するだろうベルリンの圧力に対して外交的抑止力を働かせる意図が含まれていたようにも推測される。すなわち、先述した通り軍事動員に時間がかかると判断していたエンヴェルは、オスマン帝国の参戦時期を遅延させるいち手段になるとも考えたのではなからうか。

⁹⁷ Kurat 1967, p.302. エンヴェルが初めて情報を得た日時には異説もある。トランプナー氏によれば、既に1日の地点でドイツ大使及び軍事使節団長リマンから入港許可の要請を受けていた模様である[Trumpener 1968, pp.26-27]。

を目の前で見殺しにすることなど、現実的に不可能な選択肢であった。

それでも大宰相サイト・ハリムは、このことがオスマン帝国を即時参戦に陥らせると強く警戒し、不了承の姿勢を見せていた。特に隣国であるブルガリアの動向が不明瞭であるため、参戦は同国と対峙する危険を伴うと判断していたのである。⁹⁸これに対してエンヴェルは最初から入港に賛成であった。入港を巡り司令を取り仕切っていたのは、意外にも軍部ではエンヴェルひとりだった模様で、本来なら権限上直接的に関係する筈の海軍大臣ジェマルは11日の会合で入港の事実を漸く伝えられ、再び既成事実を突き付けられる格好となったのである。⁹⁹一方で陸相の独断は、当時彼が両艦を指して口にしたとされる「我々の子が生まれた」という言葉が示しているように、それらが先日英国に没収された2隻に代わる海軍力となるとの判断からであったといえよう。¹⁰⁰しかし、そのエンヴェルも、実はイギリス艦が追撃してきた場合の砲撃については慎重な姿勢を見せていたのであった。¹⁰¹少なくとも当時、エンヴェルは軍備保持・確保を重視し、体制の整わない状況で連合国と開戦するのを快く思っていなかったのである。

結局、大宰相を含めた内閣一致で入港を認めたのは8月6日早朝であった。「統一派」政府は、4日の会議で追加要求を決定済みであった6項目をドイツ側が受諾することを条件に妥協したのである。¹⁰²しかし同時に、オスマン帝国の武装中立継続を強く主張することを忘れなかった。入港許可を受けて、地中海で袋小路に陥っていたゲーベン、ブレスラウの両艦は、10日の夕方、現地の歓迎の声こそは受けながら辛うじてチャナッカレに到着したのであった。¹⁰³

(3) ドイツ艦のオスマン帝国帰属 偶然による参戦回避

ドイツ艦を寄港させたまではよかったが、「統一派」政府の外交政策上で厄介となるこの

⁹⁸ Kurat, *Idem.*; Trumpener, *Idem.*

⁹⁹ Kurat 1967, p.303; Djemal Pasha 1973, p.118. 対独同盟調印後も「連合国との同盟打診」に動いたのは、エンヴェルを別としては恐らくジェマルのみとみられる[Cf. Arar 1986, p.198]点から、同盟締結時と同様に「親・英仏論者」外しの思惑も働いたものと考えられる。

¹⁰⁰ Arar 1986, p.188; Djemal Pasha 1973, p.118; Aydemir 1976, pp.536-537; Cf. Trumpener 1968, p.26.

¹⁰¹ Aydemir, *Ibid.*, pp.534-535.

¹⁰² ここでの誓約とは次の6項目であった。; ドイツが、1) キャプチュレーション廃止支持を約束すること、2) ルーマニア、ブルガリアとの理解を得るため助力し、起こりうる戦争勃発に関し、トルコがブルガリアと適切な合意を得られるよう取り計らうこと、3) 敵国に占領されたトルコ領を奪還するまで和平を締結しないこと、4) 万が一ギリシャが参戦し、トルコがこれに勝利した場合は、エーゲ海上の諸島がトルコに復領するよう取り計らうこと、5) トルコ東国境線をロシア領内のムスリム居住地に接するよう改正を保証すること、6) トルコが適切な戦後賠償を受け取れるよう取り計らうこと[Trumpener 1968, p.28; Aydemir 1976, p.526]。また、このとき要求された提案は、後日ワンゲンハイムの承認で公式協定となった[Trumpener, *Ibid.*, p.29]。

¹⁰³ Emil Ludwig (Çeviren, Arif Gelen) 1968: *Yavuz ve Midilli*[Aydemir 1976, pp.530-531]。

「招かれざる客」¹⁰⁴は、オスマン帝国いよいよ参戦の危機へと招き入れたのである。国際法上、中立国は参戦国の艦艇を24時間以内に強制退去させるか、武装解除させる必要があった。¹⁰⁵よってオスマン帝国の「中立」を続行させるためには、同盟国ドイツの艦隊を敵艦の直前へ放出するのは論外としても、ドイツ側に武装解除を選択してもらう他になかったのである。

そのため、11日に開かれた主要閣僚会議の結果をうけて、タラートとハリルは大使ワングェンハイムに武装解除を提案して譲歩を要請した。だが、これに対して大使が頑なに拒絶したため、中立を維持する道は事実上、一度断たれたのである。¹⁰⁶オスマン帝国の世界大戦参戦は時間の問題にある筈であった。ところがこの危機を偶然に救ったのは、下院議長ハリルによる発案であった。入港している軍艦を、そのままドイツに「売却」させるといふ打開策を思いついたのである。このハリルによる妥協案にはワングェンハイムも了承し、「統一派」政権は同盟締結から直ちにやってきた参戦危機を辛うじて回避できたのであった。¹⁰⁷しかも巧妙なことに、こうした「購入」は実際に行われず、体裁を整える上での形骸に過ぎなかったのである。¹⁰⁸

16日、このドイツ艦2隻はそれぞれトルコ式に、ヤヴズ (Yavuz Sultan Selim)、ミディリ (Midilli)と改名され、「正式に」オスマン帝国海軍艇としてイスタンブルで就航に臨んだ。¹⁰⁹「統一派」政府側では司令官に、オスマン、レシャディーエの回収ができずに失意の下に帰国したばかりの幹部将校、ヒュセイン・ラウフ (Hüseyin Rauf) を就かせる手筈になっていた。ところが、同艦隊を率いていたドイツ将校ゾーホン (Souchon) と配下の将校たちが、戦艦を手放す姿勢を全く示さなかったのである。¹¹⁰結果、ゾーホンがそのまま司令官としてオスマン帝国軍に編入されることになった。つまり、「獲得」された筈の両艦は本質的に入港時と何ら変わらない、ドイツ軍そのものであった。オスマン帝国軍の象徴たる赤いフェズを着用しながらドイツ本国に忠誠を誓う提督ゾーホンと艦隊は、これまで通りにベルリンの意向で動くオスマン軍という奇妙な存在になったのである。¹¹¹

¹⁰⁴ Aydemir, *Ibid.*, p.528.

¹⁰⁵ Arar 1986, p.189.

¹⁰⁶ *Ibid.*, pp.189-190; Aydemir 1976, pp.536-537.

¹⁰⁷ Arar, *Idem*; Kurat 1967, p.303. さらにこの後、オスマン政府はベルリン政府の回答を待たず8000万マルクでの「購入」を一方向的に公にし、トルコ世論の熱狂的支持を背景にベルリン側の反論の余地を封じてしまった。: F.O.(Germany), *Wk*, Bde. 19-20, Jagow to Wangenheim, 11 Aug 1914, No. 366; Wolffs Telegraphisches Bureau to F.O.(same), 11 Aug; Wangenheim to F.O., 12 Aug, No.485[Trumpener 1968, p.31].

¹⁰⁸ Djemal Pasha 1973, p.120; Kurat 1967, p.304; Trumpener, *Idem*. これに対してタラートは、「売却」が実際に行われたと主張している[Cf.Talat Paşa 2000, p.35]が、当時の政府財政の苦境も踏まえて考えれば、真偽の程が極めて疑わしい。

¹⁰⁹ Trumpener 1968, p.32.

¹¹⁰ Kurat, *Ibid.*, p.303. ラウフはジェマルの使節と並行する形でロンドンにわたっていた[Cf. Djemal Pasha 1973, p.104; Kutay 1983, p.882].

¹¹¹ Aydemir 1976, p.540.

とはいえ、確かにエンヴェルの狙い通り、半ば海軍が瓦解していたオスマン帝国は¹¹²この一連の事件を以って対外的な武力的切り札を保持することになったといえる。しかし同時に、このことは中央同盟傾倒を欧州世界に知らしめ連合諸国を警戒させることにつながったのである。¹¹³さらに、後にこれらの軍艦とその指令官ズーホンは、オスマン帝国を参戦させるのに決定的な役割を果たす存在となるのであった。

2. 中立維持を巡る葛藤

(1) ドイツ本国からの圧力 タラートとハリルのブルガリア、ルーマニア訪問

ヤヴズ、ミディリ両艦の帰属により、オスマン帝国の実質的なドイツ接近は早くも白日の下に晒された。しかしながら、既にヨーロッパ西部の戦線で激しい戦闘状態に陥っていたベルリン政府は、オスマン帝国がなかなか参戦に踏み切ろうとせず不明瞭な姿勢を続けていることに苛立ちを募らせていた。ドイツ軍事使節団や大使ワングェンハイムの下には、ベルリン本部の参謀総長モルトケ、外務次官ツィンメルマン (Zimmermann) といった上層部から、オスマン帝国をいち早く参戦させるよう次々に督促文書が届いていたのである。¹¹⁴ コンスタンチノーブルに直接身を置いているワングェンハイムやオーストリア=ハンガリーの大使パラヴィッチーニ (Pallavicini) ら自身は、オスマン帝国の戦時動員が終了していないことを重々承知しており、無謀なベルリンからの要求に対し不満をもっていた。¹¹⁵ しかし、ドイツ大使は本国の指令に従いながら「統一派」政府の諸閣僚に圧力を加えざるを得なかったのである。¹¹⁶ また、一方では軍事使節団を率いていたザンデルス (Liman von Sanders) がオスマン帝国の曖昧な態度に早くも業を煮やし、8月中旬、皇帝ウィルヘルム二世に全面撤退許可を請願するという事件も起きていた。¹¹⁷

一方の「統一派」政権はこういったドイツ側の圧力を苦々しく思っていた。もはや参戦義務が生じていたにもかかわらず、大宰相を筆頭とした政府閣僚の多くが参戦回避を唱えていたのである。サイト・ハリムが参戦に伴って最も不安に感じていたのは、戦時動員が未完了であったことに加え、ブルガリアの不明確な態度であった。既述の通り、先の中同盟追加項目によってもブルガリアが反ロシアで共闘することが約束されないうちは参戦すべきではないとする見解を独逸両大使に伝えていたが、大宰相は10日、いざドイツ戦艦2隻が入港したという際にもワングェンハイムを呼び出し、早過ぎる到着に激しく抗議してい

¹¹² 山内 1999、30-31 頁。

¹¹³ Cf. Heller 1983, pp.135-137.

¹¹⁴ E.g. F.O.(Germany), *I28 Nr: 8 secr.*, Bd. 1, Bethmann Hollweg to Wangenheim, 10 Aug 1914, No. 350 [Trumpener 1968, p.30].

¹¹⁵ Trumpener, *Ibid.*, p.33.

¹¹⁶ Talaat Pasha 1921, p.289.

¹¹⁷ 結果的には皇帝が要請を却下し、ザンデルスはそのまますまオスマン帝国に留まることに妥協した [Trumpener 1968, pp.33-34].

た。独大使を呼び出した彼は、トルコが開戦する羽目になり、ブルガリアが帝都に向けて侵攻してくるのではないかと訴えたのである。¹¹⁸

先のバルカン戦争でヨーロッパ側領土の殆どを失った結果、コンスタンチノーブルは地理的に隣国ブルガリアとギリシャに対して剥き出しという状態に陥っており、仮にブルガリアが連合国に加わって参戦すれば、首都を即座に蹂躪される危険は免れないとの不安が募っていたのである。¹¹⁹ただ同時に、ブルガリアに対する懸念はオスマン帝国にとってこの上ない参戦回避口実のひとつでもあった。

だが、独墺との同盟の手前、こうした懸念を放置したままではある訳にもいかず、8月中旬になってタラートとハリルはブルガリアとの同盟交渉のためにソフィアを訪れることにした。ところが、一連の交渉は19日に決着したものの、そのとき合意に漕ぎ着けたのは、「相互協議なしにバルカン諸国に宣戦しない」旨の確約のみだったのである¹²⁰。ブルガリアにとって中央同盟側に加わるのをためらわせていた最大の懸念材料は、ルーマニアであった。すなわち、北方に位置しロシアの支援を受けたルーマニアの立場が明確にならない限り、背後から侵攻される危険がつきまとっていたのである。そのため今度は、ルーマニアの完全中立を確約させるべくふたりはその足で直ちにブカレストへ向かい、ルーマニア首相ブラティアーノ(Bratiano)と会談したのであった。しかし、ブラティアーノは公式協定の調印を渋り、ブルガリアに対し中立を文書として誓約すれば、交戦中の国家たるセルビアにブルガリアが宣戦することを奨励することとなり、これがルーマニア自体の中立姿勢に反するとして婉曲的に拒否を示したのであった。¹²¹

結果、タラートらはブルガリアからロシア打倒の確約を引き出すことができなかった。つまり参戦に伴う不安要素を何ら解決しないまま、一連の交渉は失敗に終わったのである。しかしながら、逆に交渉が失敗したことで、参戦を躊躇する理由が確保されるという奇妙な「好結果」をももたらしたのであった。

(2) エンヴェルの参戦準備

タラートとハリルがソフィアに向かった頃と前後して、オスマン帝国軍参謀本部ではヤヴズとミディリの両艦が帰属した8月16日から作戦立案が開始されていた。¹²²しかし、軍の中枢においてドイツ将校は次第に存在感を増大させていたのである。16日に作戦計画に加わったのも、トルコ人ではエンヴェルと彼の腹心たる副参謀長ハフィズ・ハック(Hafiz Hakkı)のみで、会議の席は軍事使節団長ザンデルスや参謀総長ブロンツァルト(Bronzart)、クレス(von Kress)中佐をはじめとするドイツ人高級将校が殆どを占めていた。そして、彼らはそこでも参戦を急がせたい本部の意向に従い、タラートとハリルが進めているブルガリ

¹¹⁸ Trumpener 1968, p.31.

¹¹⁹ Talaat Pasha 1921, p.289.

¹²⁰ Trumpener 1968, pp.34-35; Kurat 1967, p.306.

¹²¹ Talaat Pasha 1921, pp.291-292; Talât Paşa 2000, pp.35-36.

¹²² Kurat 1967, p.305.

アとの同盟がほぼ成功確実であると見当し、軍事動員の完了をいち早く達成するようエンヴェルに迫ったのである。¹²³そもそもドイツやオーストリア＝ハンガリーにとって、オスマン帝国軍の存在は戦略上不可欠であった。伴って、最終的に絞られた軍事計画案も諸国の権益が絡み、ひとつはオーストリアが主張する黒海を越えてのロシア領オデッサ攻撃、もうひとつはドイツが主張する対英戦線を展開するためのエジプト遠征であった。¹²⁴

これをうけたエンヴェルは、自らの責務に従って着々と準備を進めていくことになった。恐らくは、多くの研究者によるこれまでの指摘とともに専らの評判である通り、エンヴェルはドイツの勝利を信じて疑わなかったのであろう。¹²⁵だがそれにしても、オスマン帝国の軍事最高責任者として職務を遂行せねばならず、「統一派」最高幹部の中でドイツと最も密接だった彼は、大戦勃発直後である 8 月のうちは難しい立場に立たされていた。同盟の履行義務を全うし、ベルリンが訴える早期参戦要求に応えなければならない反面、現実はかけ離れていたのである。¹²⁶彼はそうした状況下での無謀な参戦だけは避けたかった。

なによりも、9月になるまで軍事動員が遅々として進まなかった。先のバルカン戦争によって受けた傷で兵員徴集がままならない一方、兵装の調達も英伊両国が輸出を禁じていたため、一時は国内で婦人用ブーツまでが徴用される混乱ぶりを見せていたのである。¹²⁷まして、作戦上でヤヴズ、ミディリを使用するには、手薄になる首都直下の「海峡」を防衛する準備が整っておらず、それだけで即時参戦は論外だったのである。しかも、先日タラートらが試みたブルガリアとの同盟が失敗したことで、開戦に伴う危険は未解決であった。

加えて、政府においては「統一派」の幹部らが参戦回避論に占められていたのである。¹²⁸財務大臣ジャーヴィト、及び大宰相が主体の非戦ムードは閣僚全体に広まっていた。後述の通り、同盟締結にエンヴェルと行動を共にしたタラートやハリルですら、この時期は参戦阻止に同調する動向を見せていたのである。そして「統一派」の閣僚たちは、大宰相の指示をうけてジェマルとジャーヴィトがいち早く英仏と完全中立体制の確立に向けて交渉を始めていた。¹²⁹そして、そうした交渉はほぼ 9 月一杯まで継続していくことになるのである。

(3) キャピチュレーションを巡る動向 参戦回避を目指した一連の交渉

オスマン、レシャディーエ両艦の接收以来、イギリスとの間には緊張の度が日に日に高まっていた。しかし、ドイツの強い影響を受けた軍部が参戦へ向けて漸進するのと並行し

¹²³ *Idem.* ドイツ将校の影響力が増したのはドイツ艦の入港と無縁でなく、ゾーホンがオスマン海軍に登場することによって、1911 年以來イギリスから派遣されていた海軍使節団と団長のリンパスが撤退した [*Ibid.*, p.304; Heller 1983, p.137] ことも影響している。

¹²⁴ *Idem.*; Zeman 1971, p.58.

¹²⁵ E.g. Kurat 1967, p.296; Zeman 1971, p.55.

¹²⁶ Trumpener 1968, pp.34-36.

¹²⁷ Kurat 1967, p.307.

¹²⁸ *Idem.*

¹²⁹ Djemal Pasha 1973, pp.122-123.

て、ジャーヴィトのように元々から英仏に近しく、かつ参戦回避を唱える「統一派」閣僚は、イギリス、フランス両大使と交渉を開始していたのである。

一方でこうした姿勢に対し、特にオスマン帝国の完全中立を強く要望するイギリスにとっても、先日のドイツ艦「購入」によって強く懸念され始めた中央同盟陣営入りを防ぐべく歓迎すべきものであった。¹³⁰イギリスはオスマン帝国よりこれと対立するバルカン諸国を支持していたためトルコとの同盟の意志こそ皆目なかったが、¹³¹英仏とロシアは地理的にドイツ及びオーストリア＝ハンガリーによって分断されており、戦略上、双方の軍需物資輸送のためにコンスタンチノーブルが接する「海峡」の通航を確保することがいよいよ重要性を高めていたのである。¹³²そのため、開戦初期の段階からオスマン帝国の参戦を避けるのに熱心で、8月15日にはイギリス海軍大臣のチャーチルが直接エンヴェルに中立維持を強く要求するとともに、代償としてトルコ領の保全（integrity）を保証する旨を通達している。¹³³また、エンヴェルの同盟打診に始まった対露交渉が8月末に破談の憂き目を見ることになったのも、実はイギリスが同盟の締結を認めずロシア政府に反対したところが大きかった。¹³⁴すなわちイギリスは、オスマン帝国を自陣に組み入れるのではなく、あくまで中立にしておくことにこだわったのである。

そのイギリスに対して、8月中旬から下旬にかけて交渉を実施したのはジェマルであった。彼は英国大使マリット（Mallet）に対し、「同盟のための」主要な条件として次のような内容を提示している。¹³⁵

キャピチュレーションの完全廃止。

ギリシャに奪われた諸島の領土回復。

エジプト問題の解決。

将来的なロシアによる国内干渉を阻止するという保証。

ロシアによる攻撃があった場合の、英仏による効果的な防衛。

こうした内容は、当時「統一派」政権が抱えていた懸念を全て列挙していると同時に、率直かつ簡潔に示したものであるといえよう。しかし、ここで注目すべきは にある。すなわち、ジェマルすらも英仏とロシアが結束している状況を未だに把握していなかったことを証明しているのである。彼はこうした誤解を抱えたままイギリスに対し「同盟」を提

¹³⁰ Heller 1983, pp.136-137.

¹³¹ Zürcher 1993, p.116.?

¹³² Djemal Pasha 1973, p.124. ジェマルによれば、8月10日のドイツ艦入港以来、「海峡」は封鎖されていたようである [*Ibid.*, p.122.]. ただ、10月にエンヴェルが改めて「外国船全てに対して」完全閉鎖していることから [Trumpener 1968, pp.46-47]、ここでは恐らく戦艦など軍事に関する船の通過のみの封鎖を指していると考えられる。

¹³³ F.O.(Britain) 800/29: Sir Edward Grey's private papers [Zeman 1971, p.49; Heller 1983, p.13].

¹³⁴ Bodger 1984, p.96.

案したのであったが、イギリスが自身の同盟国たるロシアに無断で、こうした内容を呑む筈もなかった。また、マリットはキャピチュレーションに関しても廃止が戦時中には無理だと認識していたのである。そして何よりも、先に触れた通りイギリス側には同盟締結の構想自体がなく、結果的にジェマルの打診はフランス訪問に続きここでも徒労に終わることになった。¹³⁶

次に財務を司るジャーヴィトは、中立を維持するための代償として、ジェマル同様歴史的に経済復興を阻害してきたキャピチュレーションの廃止を求めた。そして、ドイツからより魅力的な条件が提示されており、「統一派」政府がドイツに傾倒しつつあると示唆しながら英仏両国の大使に要求を訴えた。ただ、ジャーヴィトもジェマルと同じ誤解を持っていた模様で、彼はロシアに対して脅威を感じていることを、当にその同盟国の英仏に切実に訴えたのである。しかし、ジャーヴィトの提案に対しても、やはり英仏からは誠意ある回答が一向に得られなかった。¹³⁷

ところが、実は「統一派」政権は外交上、比較的有利な機会を迎えていた模様である。すなわち、一方では中央同盟側の作戦としてオスマン帝国の存在は絶対的に必要なものであり、他方では連合国から中立要請がされている間であって、オスマン帝国は双方の陣営から好条件を引き出す好機となっていたのである。¹³⁸「統一派」政府はこうしたトルコを巡る欧州内駆け引きの「漁夫の利」を得る形で、9月8日、全ての外国に対しキャピチュレーションの廃止を通告、強硬措置に踏み切ることに成功した。十分な合意がないまま実施する形になったのは、後にも触れるが9月に入ってオスマン帝国財政が極めて切迫した状態に陥っていたことも主要因にあると考えられる。だがいざいざにしてこうした強引な措置には、英仏のみならず、当初はドイツ、オーストリア＝ハンガリーも激しく抗議してきたのである。ドイツ大使ワンゲンハイムはジャーヴィトに対し、同盟の破棄やドイツ軍事使節団の撤退、さらには戦争停止の後に全欧州が一致してこれを阻止することまでも示唆しながら、怒りを露にした。¹³⁹とはいえ、先のドイツ艦入港時の代償としてキャピチュレーション廃止に半ば合意していたこともあり、ワンゲンハイムとパラヴィッチーニは後日になって、中央同盟として現在のところは問題を拡大させるつもりがないことを伝えてきたのであった。¹⁴⁰

一方の連合諸国やイタリアは黙っておらず、引き続き白紙撤回を求めて抗議してきていた。これに対しオスマン帝国側では、ハリルが大宰相の要請を受諾して交渉を担当した。9月下旬を通じ、彼は大宰相の賛同を得ながら、英仏露諸国の大使に司法的キャピチュレー

¹³⁵ Djemal Pasha 1973, p.123.

¹³⁶ Heller 1983, p.138; Arar 1986, p.198. 加えてこの時ジェマルは、先日接收された2隻の軍艦を直ちに渡すようにも要求している[Heller, *Idem.*].

¹³⁷ Arar, *Ibid.*, pp.194-195.

¹³⁸ Trumpener 1968, p.39.

¹³⁹ Aydemir 1976, pp.554-557; Farrar 1973, p.62.

¹⁴⁰ Trumpener 1968, p.38.

ション (adli kapitülasyonları) から漸進的に廃止に向けていくことを譲歩案として提案しつつ、折衝を行ったのである。¹⁴¹

しかし、9月下旬になると連合国との対立が表面化してきていた。9月26日、エンヴェルが外国船に対しダーダネルス海峡を完全封鎖¹⁴²した頃と前後して、オスマン帝国と連合国の間には軍事的、外交的衝突が続くようになり、これに伴い2ヶ月にわたった一連の交渉もほぼ断絶の憂き目を見ることになったようである。早くも10月1日には、伝統的4%関税を復活させると共に、国内に設置されていた外国の郵便局を全て封鎖している。¹⁴³つまり外国側との合意を得る前に、実質的な意味で経済的キャプチュレーション(iktisadi kapitülasyonları)廃止に向けた強硬手段に出たのである。当事者のハリルも、10月以降に協議が続けられる状況になくなったことを示唆しており、交渉が事実上終了した様子が伺える。¹⁴⁴

一方で、参戦回避のためにあらゆる手段を講じてきた「統一派」政府の方針が総体的に徐々に変化していくことになった。すなわち、最高幹部たちの間に、もはや参戦に踏み切るしかないとする意識が徐々に台頭してきたのである。次章においては、オスマン帝国が参戦に至る最終局面までの経緯について考えていきたい。

¹⁴¹ Arar 1986, pp.196-197.

¹⁴² Trumpener 1968, pp.46-47.

¹⁴³ *Ibid.*, pp.38-39.

¹⁴⁴ Arar 1986, p.197.

第4章 オスマン帝国の参戦

1. 「統一派」閣僚の対立

(1) エンヴェルの閣内孤立とズーホンの黒海進出要求

ベルリンからの圧力は9月に入ってから益々激烈の度を増していた。¹⁴⁵ドイツは9月上旬にヨーロッパ戦線、マルヌでの戦闘が膠着状態に陥ったこともあり、以前にもましてオスマン帝国の参戦を急がせたい状況になっていたのである。一方その頃には、キャピチュレーションを巡って連合国との交渉が進行していたが、軍務を一手に取り仕切るエンヴェルは責務に従って武装化を進めていた。そして、軍事動員の状況が漸く進展を見せていたのである。最も作戦上で懸念されていた「海峡」防衛の準備も整いつつあり、¹⁴⁶故障していたヤヴズ、ミディリの修繕は2日に完了していた。¹⁴⁷こうした度重なる圧力の存在と参戦回避の口実が薄れていく状況下で、軍事同盟の崩壊だけは阻止したいエンヴェルは、参戦義務を履行する意志があることを明確にするため、ベルリンに対していよいよ譲歩姿勢を示していかなばならないのであった。

しかしながら、火種を蒔くような行為が参戦回避でまともだった当時の「統一派」内閣に軋轢を生じさせるのは明らかであった。キャピチュレーション廃止から6日後の9月14日、エンヴェルはヤヴズ、ミディリの司令官であるズーホンに対し、2隻を率いて黒海へ進駐した後、遭遇したロシア船を全て攻撃できる権限を付与した。しかし、これに対し大宰相が16日の閣議で辞任を示唆して猛抗議したのを口火に、エンヴェルは内閣で全員一致の反対を受け、命令撤回に追いこまれたのである。¹⁴⁸

だが、こうした大反対の存在とは別に、ズーホンらイスタンブルに留まるドイツ人海軍将校は、近いうちに連合国側がダーダネルス海峡を攻撃すると確信していた。¹⁴⁹そしてエンヴェルの命令撤回後、ズーホンは艦艇ミディリに指令し、黒海上で「攻撃」ならぬ「演習」を決行したのであった。ワンゲンハイムは大宰相サイト・ハリムに対し、黒海での軍事訓練はロシアに対する警告と威嚇の意味も込められている旨を説明したが、大宰相はズーホンがロシアに攻撃を仕掛けるつもりであるとして再び強い疑念を剥き出しにしたのである。¹⁵⁰そして、閣議においても再び大問題となって噴出した。

ジャーヴィトは20日における閣議の様子について記録している。エンヴェルは釈明として、ズーホンがロシアを絶対に攻撃しないと確約したのを信ずるべきだと訴えたものの、他の閣僚には全く信用されなかった。それどころか、ジャーヴィトはズーホンが勝手に黒

¹⁴⁵ Cf. Trumpener 1968, p.36.

¹⁴⁶ *Ibid.*, p.39.

¹⁴⁷ Heller 1983, p.138.

¹⁴⁸ *Idem.*; Trumpener 1968, pp.39-40. このときはタラートやハリルも反対に回っており、9月の段階ではエンヴェルの急進的行動とは一定の距離を保っていたことが明らかである。

¹⁴⁹ Zeman 1971, p.57.

¹⁵⁰ Trumpener 1962, p.372.

海へ出た場合にこれを砲撃する極論を、またハリルは出航後にボスポラス海峡を閉鎖してしまう案を述べ、強い警戒感を露にしたのである。そのため、結局エンヴェルはズーホンに黒海へ出ないよう伝えると、再び妥協姿勢を示さざるを得ないのであった。¹⁵¹

翌日、エンヴェルはドイツ大使に内閣としての意志を伝えた。これは第一に、トルコの権益と衝突しても、ズーホンがドイツの権益に基づいて行動してよいとの譲歩、第二に、黒海での活動を全面的に禁ずることであったが、同時に禁止を無視して行動に及んだ場合、如何なる結果についてもオスマン帝国政府としては責任を持たないと断じたのであった。¹⁵²一方ではオスマン帝国はドイツ側に対する懐柔案も示し、ズーホンを新設のドイツ海軍使節団長とすることでさらにドイツに譲歩したのである。しかし続いて海軍大臣ジェマルが彼をオスマン帝国海軍副司令官に任命し、改めて、オスマン政府の指示なしに艦隊指揮を行わない旨を確約させたのであった。¹⁵³

こうして、取り敢えずはズーホンの独断で突発的に開戦する可能性を巧みに抑えたものの、問題は山積みであった。その頃、次第に連合諸国との対立が顕著になっていたことに加えて、先に述べたようにキャピチュレーション交渉も不調に終わり、オスマン帝国では武装動員に必要な資金がいよいよ底をつき始めていたのである。

(2) 国際関係の深刻な悪化

連合国との関係悪化は避けられない状況になりつつあった。

早くもロシアとは9月28日を境に小競り合いに近い状態になっていた。ロシアとの国境付近において、オスマン帝国の支援を受けるクルド人部隊とロシア軍が戦闘を引き起こしていたのである。一方では、イギリス船がバスラ地方のシャットウルアラブで領海侵犯を引き起こし、益々英土関係を緊迫したものにしていた。¹⁵⁴

対してエンヴェルは26日、あらゆる外国船のダーダネルス海峡航行を完全に禁止、翌日から水雷及び対潜水艇用ネットの設置を断行したのである。¹⁵⁵そして外国籍郵便局の閉鎖に続き、10月7日、今度は外国籍飛行機の領内上空の航行を禁止する措置に踏み切った。イギリス、フランスの両国はこの報復措置としてダーダネルス海峡に入る戦略用物資を完全に遮断し、これによってトルコ国内の石炭燃料が大幅に不足する事態に陥ったのであった。¹⁵⁶さらにはその後、イギリスはシリア、エジプトの地中海沿岸を海上から封鎖するに

¹⁵¹ Aydemir 1976, p.557.

¹⁵² Trumpener 1962, pp.372-373.

¹⁵³ *Idem.*; Trumpener 1968, pp.41-43.

¹⁵⁴ Arar 1986, pp.199-200.

¹⁵⁵ 大宰相は抗議する連合国の大使に弁明するのに躍起になったが、閉鎖阻止のためには他に何ら有効な手段が打てなかった[Trumpener 1968, pp.46-47]。

¹⁵⁶ Kurat 1967, p.309. また、この英仏の行動は、「統一派」政府による出版物への検閲で、反連合軍調子の世論扇動が行われたことに対する措置でもある模様である。F.O.(Britain), Malet to Grey, 6 October 1914, enclosure, no. 626, 371/2143, file 5506.[*Idem.*]

及んで、オスマン帝国と一瞬触発の状態になっていった。¹⁵⁷

大宰相サイト・ハリムや財務大臣ジャーヴィトは、それでも変わらず参戦絶対阻止の姿勢を貫き通しており、さらに内閣の外でも「統一派」幹部であるナズム博士(Dr. Nâzım)や、タラートに近いイスタンブル知事のベドリ(Bedri)が参戦回避を訴えていた。¹⁵⁸その上、ジャーヴィトに近い主要幹部のヒュセイン・ジャーヒト(Hüseyin Cahit)、或いはハッラジヤン(Hallacıyan)といった面々も同様であった。¹⁵⁹しかし、英仏との交渉の相次ぐ失敗、事態の悪化という現実と直面して、軍事同盟の存在を知る「統一派」政権の閣僚内では次第に参戦も止む無しとの諦観も広まりつつあったのである。海軍大臣ジェマルは、早くもイギリスとの交渉が失敗した後に参戦準備に回っていた。¹⁶⁰さらに、懐柔的立場に回っていたタラートや、先日まで連合軍との交渉に当たっていたハリルも、参戦に賛同する意向を見せ始めていたのである。¹⁶¹特にタラートは、参戦履行義務違反をいつまでも続け、同盟に対して不誠実な対応を取りつづけることにも疑問を見せ始めていたのであった。¹⁶²

(3) 財政問題

タラートらがこれまでの参戦回避姿勢を翻した要因には、対外状況の悪化だけに限らず、時期的に見てキャピチュレーション廃止に対する英仏の非妥協的な姿勢、及び財政難も絡んでいると考えられる。そもそもオスマン帝国が武装中立を続行するための致命的な問題は財政にあり、遅くとも9月中旬には顕著になっていたのである。事実、14日には資金の獲得を巡って財務相ジャーヴィトと陸相エンヴェルの間に議論が起こっていた。前者の記録は次のようなものである。¹⁶³

- 今日、大宰相の処に集合した。会議の要請はエンヴェルパシャからあった様子だった。陸相は長々と軍事面の需要について言及した。1ヶ月当りで200万金(=トルコリラ)以上が必要な模様である。私も無論、そうした資金を供与することなど不可能で、収入も枯渇していることを教えた。(そして)資金を捻出するのも無理だとも話したのである。しばし議論を行った後、陸相は1ヶ月当り50万トルコリラで同意した。

(1914年9月14日付) -

アイデミル氏の調べによれば、ジャーヴィトは戦後の議会調査委員会において、開戦当時のオスマン帝国国庫に僅か92000トルコリラしか残っていなかったという悲惨な実態を

¹⁵⁷ Kurat, *Ibid.*, p.310.

¹⁵⁸ Trumpener 1968, p.44.

¹⁵⁹ Ali Haydar Mithat 1946, p.267.

¹⁶⁰ Kurat 1967, p.308; Aydemir 1976, pp.557-558.

¹⁶¹ Trumpener 1968, p.48.

¹⁶² Talât Paşa 2000, p.36.

¹⁶³ Aydemir 1976, p.556. ()内は筆者の補足による。

告白している。¹⁶⁴こうした逼迫した経済状況にあっては、財政窮乏を直ちに解消する手段はなく、せいぜいキャピチュレーションを廃止することで漸次的な回復を狙うくらいしかないはずだったに違いない。ところが25日の閣議において、エンヴェル（及び恐らくタラート）が資金をドイツから借入するという大胆な打開案を提起したのである。財務相はドイツが代償として即時参戦を迫ってくると大反対したが、¹⁶⁵陸相たちはジャーヴィトに対してまたしても極秘にしたまま、ベルリンから軍資金を獲得すべく奔走したのである。¹⁶⁶

だがジャーヴィトの懸念は的を射ていた。10月11日、ワンゲンハイムが大使顧問のキュールマン（Kühlmann）に加え、タラート、ハリル、エンヴェルそしてジェマルの4人、いわば当時の「参戦派」を招待した食事会が開かれた。そこではオスマン帝国に200万トルコリラの資金提供が約束される一方、彼らが参戦で一致すること、そして大宰相がこれに反対した場合、辞任を要求することが確認されたのである。¹⁶⁷

ところが、翌日に「統一派」閣僚実力者間で行われた会議は一転して紛糾した。ジャーヴィトが、参戦なら辞任する姿勢を示唆したのである。さらに、昨日は参戦に同意した筈のハリルが再び一転、やはり中立状態を来年春まで延期するべきだと主張したのであった。そのため、混乱の中で決定されたのは唯一、オスマン帝国軍の現状での能力を軍部で調査することだけであった。これを受けて21日、陸軍中佐キヤーズム（Kâzım [Karabekir]）とアリー・イフサン（Ali İhsan [Sabis]）は報告書をまとめたが、オスマン軍の潜在能力は未だ開戦には不十分とするものであった。¹⁶⁸

しかし、ドイツとの契約は既成事実化していた。同日までにベルリンから合計約200万トルコリラ相当の純金がコンスタンチノーブルに到着していたのである。¹⁶⁹契約を無視して更なる中立延長に踏み切れれば、今後の資金援助はおろかドイツ軍使節団の全面撤退、同盟解消で孤立化に逆戻りしてしまう恐れも十分に推測されたに違いない。すなわちオスマン帝国にとっては、この借入が否応無しに参戦へ後押しする決定打だったのである。

¹⁶⁴ *Idem.*

¹⁶⁵ Y.H.Bayur 1952: *Türk İnkılabı Tarihi*, Ankara, vol.3, p.181[Kurat 1967, p.307].

¹⁶⁶ Kurat, *Ibid.*, pp.307-308; Trumpener 1962, pp.374-376; Cf. Zeman 1971, p.60; Djemal Pasha 1973, p.129.

¹⁶⁷ Djemal Pasha, *Idem.*; Trumpener 1968, p.49. ジェマルは大宰相も招待されたとしている。しかし、参戦で一致する論議の場に大宰相がいるのは不自然で、ジェマルの証言を虚偽であるとするトランプナー氏の主張[Trumpener 1968, p.49]は正確であると筆者はみている。

¹⁶⁸ Kurat 1967, p.311.

¹⁶⁹ 金は16日、21日の2度にわたり、陸路でルーマニア、ブルガリアを經由して輸送された[Trumpener 1968, pp.50-51]。また11日の合意とは別に、エンヴェルは9月30日頃にも在ベルリン大使ムフタル（Ahmet Muhtar）を通じ、500万トルコリラの資金援助をベルリン政府から取り付けていた[*Ibid.*, pp.48-49]。

2. オスマン帝国の参戦

(1) ロシアへの攻撃命令

オスマン帝国はもはや後戻りができない状態に置かれていた。しかし、「統一派」政府内は最後までまとまらず、特にジャーヴィトはそれでも中立続行を唱えて止まなかったのである。10月25日、主要閣僚の間で行われた会議でも、参戦を主張する意見が出る一方で、さらに6ヶ月間の中立期間が必要であることをドイツ側に理解してもらうため、ハリルと陸軍参謀議長ハフィズ・ハックをドイツに派遣すべきとする意見で分かれることになった。肝心の大宰相は、こうした今後の方針を大きく左右する会議に際して曖昧な態度を示すのみで、かなり困惑していた模様である。一方、殆どのメンバーは参戦を選択したが、後者をジャーヴィトが強く主張したのであった。¹⁷⁰キヤーズムらの手厳しい報告が届けられたこともあり、最終的にはジャーヴィトの意見が通る形で、参戦延期の最後の望みを賭けて2人の派遣が決定されたのである。ハックは直ちに向かったが、ハリルはバイラム初日の祝典に出席するため、遅れて29日に出発することになっていた。¹⁷¹

ところが、情勢はハリルの出発を待つことなく突発的に動いた。

ズーホンの指示によって黒海に出撃したオスマン艦隊が、遂にロシアを攻撃したのである。彼の率いるオスマン帝国海軍の一団は、10月29日明朝、黒海沿岸のロシア領オデッサ、セバストポリ、ノヴォロシスクなどを砲撃し破壊した。さらに、航行中に遭遇したロシア海軍の機雷敷設艦をボスポラス海峡付近で撃沈するなどして、ロシアに大きな被害をもたらしたのである。¹⁷²

このロシア奇襲の指令を誰が出したかについては、エンヴェルによるとの説が有力であるものの、断言はできない側面を含んでいる。代表的な研究では、トランプナー氏はドイツ外務省文書を中心に論拠とし、領土直接攻撃には関知していないものの、艦艇攻撃についてはエンヴェル、ジェマルの綿密な計画の下に指令されたと指摘をしている。¹⁷³また、クラト氏も同様にアリー・イフサンの回顧録を論拠に、エンヴェルの指示があったと述べているのである。¹⁷⁴しかし、当時の様子を内相タラートは次のように回想している。¹⁷⁵

我々の誰一人、事前にこの事件(=ロシア奇襲)のことを知らなかった。しかし、皆と同様に私もエンヴェルパシャの伝令だと信じていた。バイラムの日(=10月29日)下院議長ハリルベイの邸宅に集合した。私はエンヴェルパシャを執拗に非難したものの、彼はなにひとつ伝令などなかったと誓って保証したのである。

¹⁷⁰ Djemal Pasha 1973, pp.129-130.

¹⁷¹ Kurat 1967, pp.311-312; Arar 1986, p.208.

¹⁷² Zeman 1971, p.60; Kurat 1967, p.313.

¹⁷³ Trumpener 1962, p.378; Trumpener 1968, pp.51-55.

¹⁷⁴ Sabis, A.İ. 1951: *Harb Hatıralarım*, vol.2, p.40[Kurat 1967, p.312].

¹⁷⁵ Talât Paşa 2000, p.36. () 内は筆者の補足による。

こうした証言に加え、ジェマルが回想録に何ら記述していないのはもとよりである。¹⁷⁶さらにこの局面に関しては、戦後、ハリルと偶然出会ったエンヴェル本人が明確に否定しているのである。¹⁷⁷確かに、ズーホンは海軍使節団長就任からオスマン軍上層部の命令なしで動ける立場になく、或いは戦後の戦争責任問題も存在したから、当事者の証言を完全に信用できるとはいえないかもしれない。しかしながら、果たして真偽はまだ確証しきれないというほかにないと考えられる。

(2) 内閣の危機から宣戦布告へ

いかなる背景があったにせよ、この攻撃という事実はドイツとの同盟を関知しない者も含むサイト・ハリム内閣全員の知るところとなり、結果的に内閣そのものを崩壊状態に陥らせることになった。ロシアへの攻撃は連合国との開戦と同義であり、参戦に警戒感を抱いてきた大宰相らには絶望的な事態だったのである。

サイト・ハリムは激怒し、ジャーヴィトと共に直ちに作戦を中止するよう抗議した。これをうけたエンヴェルは直ちに艦艇の出航停止を命令したが、翌日になって大宰相はジャーヴィト、及び農業大臣スレイマン(Süleyman El Bustanî)ら3人の閣僚と共に辞意を表明したのであった。¹⁷⁸一方でそうした姿勢に対し、陸相は30日夜までに抗議を停止しなければ追放も辞さないとの構えを見せ、¹⁷⁹政権内は俄かに紛糾した。しかし、「統一派」の党最高機関たる「中央委員会(Merkez-i Umumî)」の要請を受け、大宰相らが同日中までに辞意を撤回すると、こうした混乱は一時的に沈静化したのであった。¹⁸⁰

ロシア大使が激しく抗議してくる一方で、英仏はなんとか妥協点を探るべく、ヤヴズ、ミディリ両艦の武装解除やドイツ使節団の排除を最終的な代償案として提示してきていた。しかしロシア攻撃という既成事実と直面して、意見を左右させてきたタラートをはじめ、殆どの閣僚はもはや参戦を免れないと判断していた。¹⁸¹政府には、既にカフカス地方の国境でロシア軍が結集しつつあるとの情報が打電されており、宣戦布告は時間の問題になっていたのである。¹⁸²そうした中、大宰相だけは最後の手段としてロシアに直接釈明することを主張し、11月1日に釈明文が打電された。しかし「黒海での交戦はロシア艇によって引き起こされたものである」と記した釈明に対してロシア外相ザゾノフから出された謝罪受諾の条件は、英仏の提案同様、トルコで活動するドイツ軍事使節団の完全撤退のみであった。¹⁸³無論、これを撤退させることが緊迫した軍事的状態で不可能なことはロシアも承

¹⁷⁶ Djemal Pasha 1973, pp.130-131.

¹⁷⁷ Arar 1986, p.208.

¹⁷⁸ Trumpener 1968, pp.55-56.

¹⁷⁹ F.O.(Germany), 128 Nr.5 secr., Bd. 4, Wangenheim to FO, 30 Oct 1914, No. 1160[*Ibid.*, p.56].

¹⁸⁰ Trumpener, *Idem.*

¹⁸¹ Talât Paşa 2000, p.37.

¹⁸² Talaat Pasha 1921, p.294.

¹⁸³ Russia 1931-36: *Die Internationalen Beziehungen im Zeitalter des Imperialismus. Dokumente aus den Archiven der Zarischen und der Provisorischen Regierung*, ser. 2, : , Berlin,

知の上だった。すなわち、最後の和解案は頭ごなしに拒絶されたのである。

釈明の失敗を受け、サイト・ハリムは改めて辞任の意志を固めていた。そもそも自分を無視してエンヴェル、タラートらによって遂行された一連の外交に対しても怒り心頭に達していたのである。大宰相の再度の辞意表明によって、オスマン帝国は国家最大の危機を目の前にしていよいよ政権瓦解の寸前という事態となり、政府中枢は再び大混乱の様相を呈していった。しかし、タラートから「自ら調印した同盟に責任を持って」との説得を受け、混乱を避ける意味でも彼だけは宰相の地位に留まることとなり、事態は沈静化したのであった。¹⁸⁴一方で、先に大宰相と共に辞任を表明していたジャーヴィトラ 4 人の閣僚は辞任を認められ、宣戦布告が行われる前に内閣を去っていった。¹⁸⁵

こうしてオスマン帝国は、参戦回避に向けられた尽力の甲斐もなく、4 年にわたる破滅的な世界大戦へと身を投じていったのである。11 月 2 日、ロシアが宣戦布告すると、5 日、これに続く形でイギリス、フランス両国もオスマン帝国に対して宣戦した。11 日にはそれら連合国に対してオスマン帝国も宣戦布告、14 日にジハード宣言を行うに到り、ドイツ及びオーストリア＝ハンガリーとの同盟締結から約 3 ヶ月続いた中立体制は完全に崩壊したのであった。¹⁸⁶そして結果は周知の如くオスマン帝国は敗北し、1918 年 11 月、エンヴェルやジェマル、後に大宰相を務めたタラートといった「統一派」首脳の亡命と共に、同組織とその政府は瓦解する運命を辿ったのである。¹⁸⁷

pp.355-356[Trumpener 1968, p.58].

¹⁸⁴ Trumpener, *Ibid.*, p.59; Arar 1986, p.204; Talât Paşa 2000, p.37. 一方、実際は大宰相が「統一派」による粛清を示唆された、つまり脅迫された疑いもある模様である[Trumpener, *Idem.*]. 秘密結社出身の「統一派」の性格からすると、決して否定できない面があると考えられる。

¹⁸⁵ この時辞任したのは、ジャーヴィトに加え、農商大臣スレイマン、公共事業大臣チュルクスル・マフムード(Çürüksulu Mahmud)、郵便大臣オスカン(Oskan)であった[Djermal Pasha 1973, p.132; Bayur 1953-1967, p.259]. ただ、「統一派」において強い力を保持していたジャーヴィトだけは、辞任した後も財務関連の権威として閣外から政府に助力、後に閣僚に復帰することになった[Çavdar 1984, p.369; Aydemir 1976, p.588].

¹⁸⁶ 新井 2001、147 頁。オスマン帝国の宣戦布告文、及びジハード宣言については、Aydemir 1976, p.588-589 参照。

¹⁸⁷ Cf. 山内 1999、35-56 頁。

第5章 結論

オスマン帝国の第一次世界大戦参加の直接的な原因は、オスマン軍艦隊によるロシア奇襲であることは明白である。しかしこれまで記してきたように、そうした可視的要因に辿りつくまでには外的、内的双方で遠因となる紆余曲折を経ているのである。

そもそもドイツ陣営接近という事態は、あくまでも偶然の末に辿りついた結果であった。実際は、「統一派」政府は英仏露陣営への参加を望んでいたものの、タラート、ジェマルらの努力が全て徒勞に終わったことで、その道が半ば断たれているとの認識が広まったのである。中央同盟傾倒への一因は既にそうした時点に見出すことができるといえよう。とにかくヨーロッパ世界における孤立を脱することが当初の目標であった彼らが、各国が冷淡な姿勢を見せる一方で、意外にも一転して好意的姿勢を見せたドイツとの同盟機会を逃さぬよう、手段を尽くすのは当然の行為だったのである。しかし恐らくは孤立状態脱出を達成したい焦燥感から、大宰相をはじめ交渉に携わったメンバーは、ドイツ側が同盟打診に応じた真意、すなわちオスマン帝国を「即戦力」と判断していた点まで読み切れなかったのではないかと推測される。また、「統一派」政権は対露対策を常に念頭に置いていたが、当初ロシアとの対峙に伴って英仏をも敵にまわす危険性までは想定していなかった可能性が非常に高い。同盟締結の成功を盲目的に追求するあまりジェマルやジャーヴィトを交渉から外し、議会議場を閉鎖して諫言、反論を封じたのは、大宰相らの明らかな失策であった。

しかしながら、その後「統一派」政権の閣僚たちは武装中立宣言後の一定期間において、即時参戦を回避すべきとする意識で完全に一致していた。本来、「統一派」は組織の性格的な面から全体が統一見解で動くことは少なかったが、この意識に関してはエンヴェルですらも共有していたのである。ただ同時に、軍事責任者たる陸相が職務に法り軍事力確保に努めるのも当然であった。ゲーベン、ブレスラウ入港を歓迎したのも、決して外交上の結果論を考慮しつつ早期開戦を謀った訳ではなく、単に軍事力の面における打算に基づいていたと考えられる。

中立体制確立を目指して、大宰相やジャーヴィト、ハリル、或いはジェマルといった閣僚は8月から9月にかけて連合諸国の大使と交渉に臨んでいった。ドイツ司令部のベルリンから参戦の履行義務違反について再三にわたる追及があったのは事実であったが、彼らは微塵もドイツの言いなりにならなかったのである。しかし一方、ドイツとの影響力が次第に拡大する状況下であり、軍事的観点からも同盟破棄に及ぶ訳にもいかずに難しい立場に立たされていったのがエンヴェルであった。結果、彼は他の閣僚に先立って早期参戦も視野に入れ始めたのであった。

そうした行動は、当初エンヴェルを閣僚内で異質な存在とすることになったが、「統一派」政権内では同じ実力者のジェマル、タラート、ハリルが、参戦も止む無しの諦観を次第に持ち始めていった。これは対英、対露関係の悪化に加えて、恐らくはキャピチュレーション廃止に対する英仏の非妥協的対応と財政窮乏の問題から、現実的判断で決意した

結果ではないかと考えられる。そして大宰相やジャーヴィトが反対する中、エンヴェルらがドイツに対して資金借入を要請したことで、オスマン帝国の早期参戦は半ば揺るがないものとなったのであった。すなわち、政府が参戦に傾倒する結果になったのは、彼らの積極姿勢に反して、終始英仏との交渉が不調にあったことにも起因しているといえる。クラト氏も、もし連合諸国から十分な物的保証 (material guarantee) があれば中立を引き続き維持したであろうと結論付けているが、¹⁸⁸極めて的を射た総括であろう。

そもそも「統一派」閣僚たちは、参戦問題に限れば確固たる派閥に分化していたというより、むしろ各々の見解に従って、流動的かつ柔軟な立場をとっていたようにみられる。それが顕著なのはハリル、ジェマル、或いはタラートであろう。ただ、閣僚間で最終的に亀裂が生じてきたのは、既述のような内外の状況悪化に加えて、彼らの間で軍事同盟に対する根本的な意識の相違があったためでもないかと考えられる。言い換えれば、確かに彼らは参戦までの期間を稼ぐべきだとして一致していたものの、その「時間稼ぎ」の動機に違いがあったとみられるのである。比較してみると、エンヴェルはあくまで対独同盟維持と将来的な参戦義務の履行を前提に、参戦までの十分な準備期間を設けるべきと判断していた模様である。軍事的準備を淡々と進めていたのはその証拠となろう。一方でジャーヴィトのように最後まで参戦阻止の姿勢を見せた者は、状況を静観する時間を設けようとし、場合によっては軍事同盟の破棄をも考慮に入れていた筈である。因みに、少なくとも大宰相は実際にそうした考えを証言しており、彼は「私は決して参戦しないと言っている訳ではない。だが、とにかく暫くは待たねばならない。どちらかの陣営が勝つなら、また国益がいずれかの陣営に加わることを必要とするなら (birlikte yürüme yi icap ediyorsa)、それに従って考慮しながら、決断し支持しなければならないのだ」と話していたようである。¹⁸⁹

しかしながら、最終的に方法論の面ではいずれをとっていたにしても、彼らは全て、厳しい対外状況の中で愛国的精神に基づき、最善を尽くそうとしたのは間違いない。

サイト・ハリム、ジャーヴィトは英仏接近を国益以上の優先目的としながら参戦回避を唱えた訳でなかった。一方でエンヴェルは、最終的に参戦すべきだと決意していた模様だが、終始一貫して開戦を期待し、これを謀っていたとは考え難いのではないだろうか。陸相による対独譲歩は、軍事同盟の存在が国益に則しているとの判断から、これを護る姿勢をとった結果に過ぎないように考えられる。同時に、やはりエンヴェルによる独裁体制の存在、また巷説に見られる如きドイツへの「売国奴」的評価は否定されるといえよう。敢えて付け加えるならば、彼の同僚たるジェマルやハリルといった面々が彼を弁護していることも、¹⁹⁰そうした誤解を否定する論拠として改めて見直されるべきである。

本論は、以上のような結論を以ってひとまずの区切りとしたい。

(終)

¹⁸⁸ Kurat 1967, p.315.

¹⁸⁹ Ali Haydar Mithat 1946, p.268.

¹⁹⁰ Djemal Pasha 1973, p.128; Arar 1986, p.197.

- 参考文献一覧 -

(日本語文献)

- 新井政美 2001 : 『トルコ近現代史 - イスラム国家から国民国家へ』 みすず書房。
岡部健彦 1978 : 『世界の歴史 20 - 二つの世界大戦』 講談社。
木戸蒔 1977 : 『世界現代史 24 - バルカン現代史』 山川出版社。
ジョル、ジェームス 1997 : 『第一次世界大戦の起源』 (池田清訳) みすず書房。
坂本勉 1993 : 「西洋化」するオスマン帝国」、坂本勉 + 鈴木董(編)、『イスラーム復興はなるか - 新書イスラームの世界史』 講談社現代新書。
坂本勉 1996 : 『トルコ民族主義』 講談社現代新書。
三橋富治男 1966 : 『オスマン = トルコ史論』 吉川弘文館。
山内昌之 1999 : 『納得しなかった男 - エンヴェルパシャ、中東から中央アジアへ』 岩波書店。

(外国語文献)

回顧録

- Arar, İsmail (ed.&Intro.) 1986: *Osmanlı Mebusan Meclisi Reisi Halil Mentеше'nin Anıları*. İstanbul:Hürriyet Vakfı.
Ali Haydar Mithat 1946: *Hatıralarım 1872-1946*. İstanbul: Akçit.
Djemal Pasha 1973: *Memories of a Turkish Statesman, 1913-1919*. New York: Arno Press.
Talaat Pasha 1921: "Posthumous Memoirs of Talaat Pasha," in *Current history*. Vol.15, no.2. November. New York: The New York Times.
Talât Paşa (Yayına Hazırlayan: Alpay Kabacalı) 2000: *Talât Paşa'nın Anıları*. İstanbul: Türkiye İş Bankası.

論文、研究文献

- Ahmad, Feroz (Çeviren: Nuran Yavuz) 1995: *İttihat ve Terakki 1908-1914*. İstanbul: Kaynak.
Aydemir, Şevket Süreyya 1976: *Makedonya'dan Ortaasya'ya Enver Paşa*. cilt.2. İstanbul: Remzi.
Bayur, Yusuf Hikmet 1953-1967: *Türk İnkılabı Tarihi*. cilt.2, kısım.3. Ankara: Türk Tarih Kurumu.
Bodger, Alan 1984: "Russia and the End of the Ottoman Empire," in Marian Kent (ed.), *The Great Powers and the End of the Ottoman Empire*. London: Allen&Unwin.
Bridge, F.R. 1984: "The Habsburg Monarchy and the Ottoman Empire, 1900-1918," in Marian Kent (ed.), *The Great Powers and the End of the Ottoman Empire*. London: Allen&Unwin.
Çavdar, Tefvik 1984: *Talât Paşa: Bir Örgüt Ustasının Yaşam Öyküsü*. Ankara: Dost.

- Farrar, L.L. Jr 1973: *The Short War Illusion: German Policy, Strategy&Domestic Affairs August-December 1914*. California: Clio.
- Fulton, L. Bruce 1984: "France and the End of the Ottoman Empire," in Marian Kent (ed.), *The Great Powers and the End of the Ottoman Empire*. London: Allen&Unwin.
- Heller, Joseph 1983: *British Policy Towards the Ottoman Empire 1908-1914*. London: Frank Cass.
- Kurat, Y.T. 1967: "How Turkey drifted into World War ,," in K.Boune & D.C.Watt (ed.), *Studies in International History*. London: Longmans.
- Kutay, Cemal 1983: *Şehit Sadrazam Talat Paşa'nın Gurbet Hatıraları*. cilt.2. İstanbul.
- Trumpener, Ulrich 1962: "Turkish Entry into World War : An Assessment of Responsibilities," in *The Journal of Modern History*. Vol.34. New York: The University of Chicago Press.
- Trumpener, Ulrich 1968: *Germany and the Ottoman Empire 1914-1918*. Princeton: Princeton University Press.
- Trumpener, Ulrich 1984: "Germany and the End of the Ottoman Empire," in Marian Kent (ed.), *The Great Powers and the End of the Ottoman Empire*. London: Allen&Unwin.
- Tunaya, Tarık Zafer 1984: *Türkiye'de Siyasal Partiler*.vol.1. İstanbul: Hürriyet Vakfı.
- Zeman, Z.A.B. 1971: *A Diplomatic History of the First World War*. London: Weindenfeld and Nicolson.
- Zürcher, Erik J. 1993: *Turkey: A Modern History*. London: I.B.Tauris.